

盟連羽灰

脚本集 第四卷

第四話、第五話収録

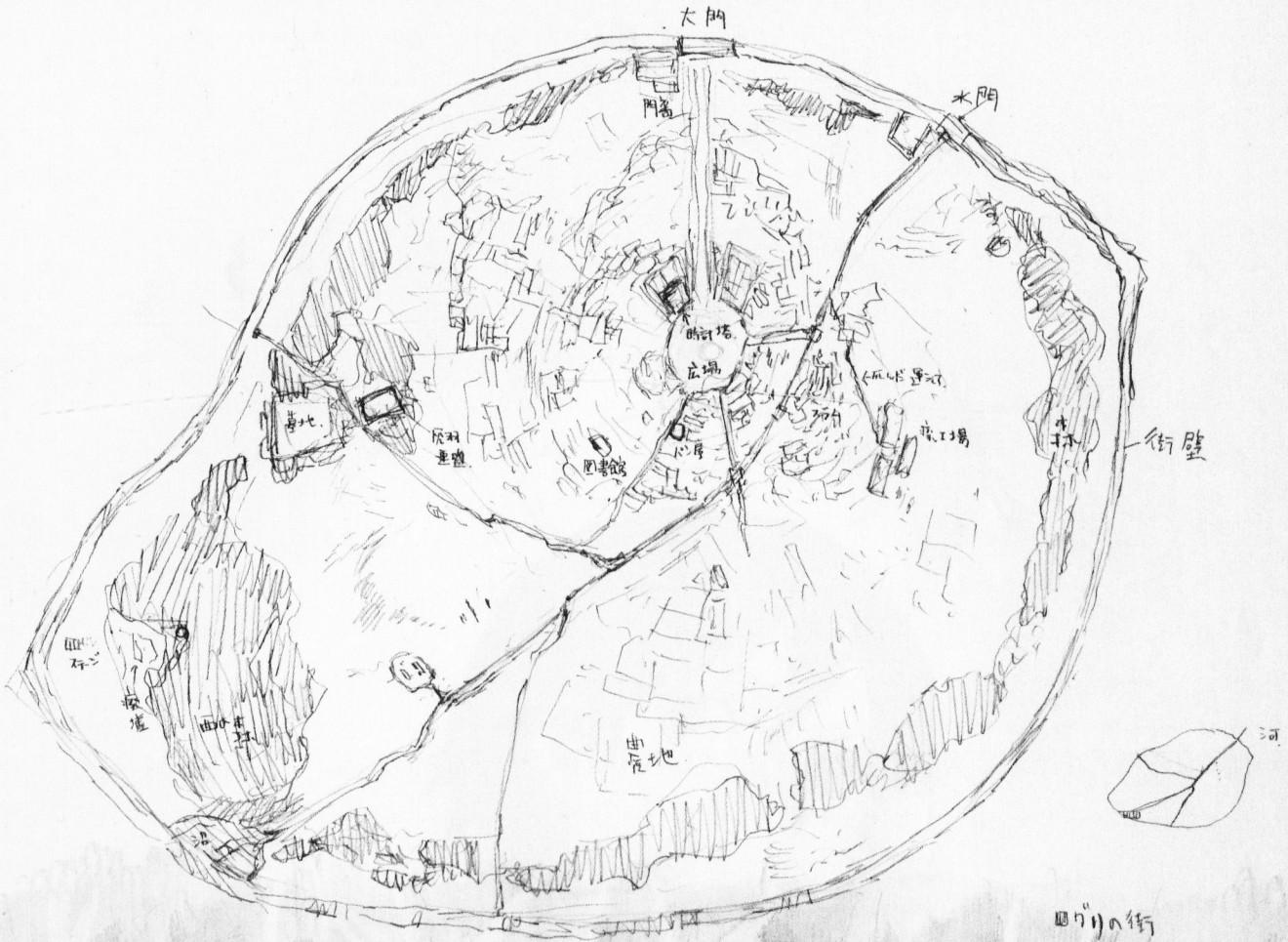


安倍吉俊

灰羽連盟脚本集

第四卷





灰羽連盟

LA FILLE QUI
A DES AILES GRISSES

HAIBANE - RENMEI

灰羽連盟

脚本・安倍吉俊

第04話 ゴミの日・時計塔・壁を越える鳥

第2稿 (2002.05.23)

▲第4話。1稿がペラ74枚、2稿が86枚。2稿でページが増している。ゲストルームの朝食のシーンを追加した。オールドホームの6人は、できるだけ毎回出したかった。

この頃から、僕自身が世界観やキャラクターに馴染んできて、自分でも驚くほど筆が進んだ。

進みすぎて、枚数ずいぶんオーバーしてしまってますが……。

○登場人物

ラツカ

カナ

レキ

ヒカリ

クウ

ネム

親方（時計塔の管理人）

灰羽連盤

● サブタイトル

● 闇

闇闇。何も無い空間に、ラッカがぼつねんと立っている。不安げな表情。暗闇の中に、ほんやりと黄色い小さな光点が見える。闇の暗さが変わるわけではないのだが、夜目に慣れてくるように、次第にそれが鳥の眼だと分かる。黒い鳥。黄色く光る眼と、嘴（くちばし）がラッカの方を向いている。

ラッカ「……鳥だ。……私、どこかで……」

身を屈め、鳥に触れうとするラッカ。不意に、遠くで幽かにゴーン、と鐘の音がする。時を告げるように、鐘の音は繰り返し、ゴーン、ゴーンと響く。

ラッカ「……なに、これ？」

音は次第に近づいてきている。ラッカ、焦り、周囲を見回すが、周囲は闇に包まれ、何も見えない。

突然耳元で激しい鳥の羽ばたきを聞き、はっと振り返るラッカ。だがもうそこには何もない。ただの均質な闇。鐘の音はどんどん大きくなる。大きくなるに従い、暗く荘厳な鐘の音から、へっぽこなブリキのバケツを叩くような音に音質が変化する。

● ゲストルーム／朝

カナ「お・き・ろー……!!!」

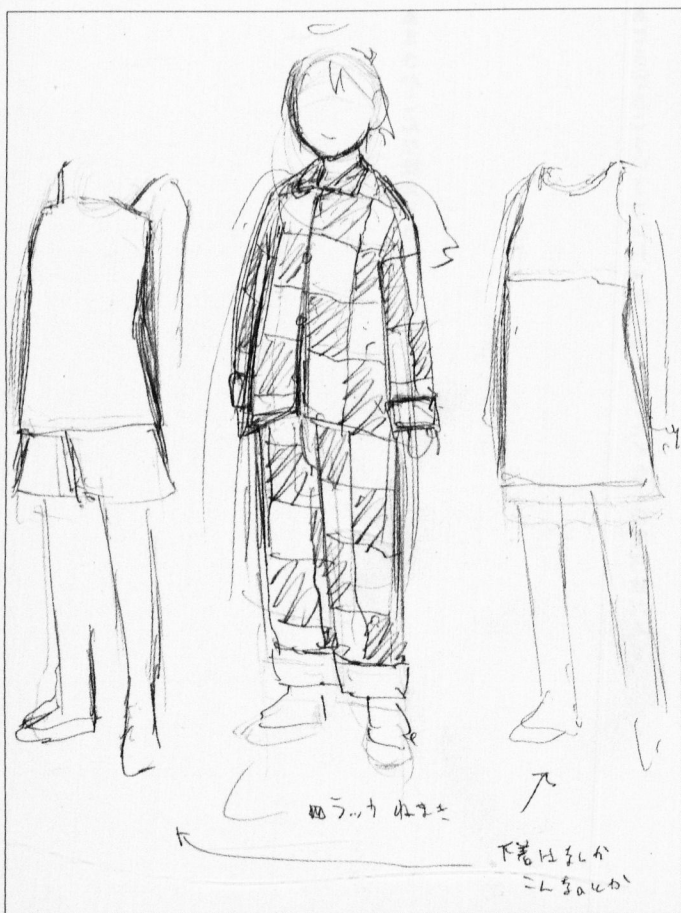
ブリキのバケツを、脱いだ靴の踵でがんと叩くカナの姿が画面いっぱいに大写しになる。

ラッカ「わああああ」

ベッドから跳ね起きるラッカ。寝巻き姿。すぐ脇に仁王立ちのカナ。ラッカ、寝ぼけていて何が何だか分からない、という感じで辺りをきよるきよる見渡す。

ラッカ「なに？なに？……あ、……カナ」

カナ「あ、じゃないー今日、アタシの仕事手伝うって言ったじゃん」



ラッカ「ふあああ（あくびじゃなく、「あー」という驚きの声が目
 くて不明瞭になっている感じ）。そうだった。いま何時？」

カナ、ポケットから懐中時計をとり出す。

カナ「6時34分」

ラッカ、氣を失ったみたいに、ヘナヘナくとベッドに倒
 れ込む。

ラッカ「眠いゝ死ぬゝ」

カナ「アホか！」

カナ、布団に潜り込もうとするラッカの光輪をつまんで
 引っぱり上げる。光輪にひっぱられ、操り人形のように
 両手をばたばたさせながら起き上がるラッカ。

ラッカ「やめてやめてー」

カナ「ホラ、とつとと起きる！」

●洗面所

洗面所。コント仕立てのようなちよつと引いた、洗面台
 を正面に据えた構図。

なぜか枕を片手に、のたのたと洗面所に入ってくるラッ
 カ。目を開けていられない、という感じの表情。洗面台
 の前に立つ。構図的には画面に背中を向ける事になる。

緩慢な動作で枕を洗面台の脇にある棚のような脱衣籠の
 上に置き、水道の蛇口をひねる。洗面台に水がたまって
 いく音。それをぼーっと聞いているラッカの後ろ姿。羽
 がだらんと垂れ下がっている。間。

蛇口を閉め、おもむろに洗面台に顔を突っ込む。じゃぼ
 ん、と言う音。一瞬の間の後、羽がぶるると震えながら
 びん、と立つ。ぶくぶくくと空気を吐く音。

ラッカ「ぶあっ」

ラッカ、がばつと水から顔を上げる。手探りでタオルを
 探す仕草で、何度か空振りしながら隣の脱衣籠の枕をつ
 かむ。タオルではない変な感触に驚いて、自分が手に取っ
 たものを見るラッカ。

ラッカ「……………」

▲まさかこんな設定とは。

▲ときどきこういうコントっぽいものをしたくなるのは何故だろう。

『何故こんなところに枕が』という感じで呆然とする。

●ペランダ

手すりに紙の小箱があり、パンくずが入れてある。それを見つけてつまみあげ、顔をしかめているカナ。

●洗面台

着替えているラッカ。2話冒頭と同じようなシーンだが、羽がうまく通せなくて四苦八苦していた2話とは違い、少し手慣れてきている。羽根をたたんでワンピースの服をすくと胴に通し

ラッカ「よい……………しょ！」

と、いう声と共に、ぱっと、背中の羽袖から羽が飛び出す。

カナ「ラッカ！」

戸口の向こうからカナの声。ラッカ、ちよつと戸口を見、その後、鏡に向かって両手でぺちんと頬を叩く。羽も一緒にぺちんと打ち合わされる。

ラッカ「がんばんなきゃ」

●ゲストルーム

片手を腰に当て、片手で紙の小箱を持っているカナ。

カナ「これ、ラッカが置いたの？」

枕をベッドに戻して、にっこり笑うラッカ。

ラッカ「うん。鳥が食べるかと思って」

カナ、小箱をこみ箱に捨てる。驚くラッカ。

カナ「駄目だよ。カラスが集まってきちゃう。ただでさえゴミを散らかされて困ってるのに」

ラッカ「……………あ。うん、でも……………」

ラッカ、傷つき、少し慥然とする。反論の言葉が口をついて出かかると、カナ、そんなラッカには構わず

▲紙の小箱の折り紙は、美術系の予備校生（日本画だけかな）の得意技。みんな、いらぬ紙で小箱を折って、そこに鉛筆や木炭の削りくずを捨てていた。僕は折り方が分からなくて、こみ箱の形でせこせこ削っていた。

▲ずいぶん細かいディテールを指示している。小ネタの連続だが、一応ラッカの成長を表している（つもり）。

カナ「そうだ、ゴミ。ラッカ、キッチン、ゴミ出しちゃう」と、言うだけいって一人でキッチンに行ってしまう。言葉の接ぎ穂を失い、一人でぶくつと頬を膨らますラッカ。

●中庭。北第二棟付近

大きなゴミ箱を抱えて、すたすたと焼却炉へ向かうカナと、麻布のような素材でできた小さなゴミ袋を、服が汚れないように体から離して持ち、よたよたと後を追うラッカ。生ゴミらしく、袋の下から少し水滴が滴っている。

●焼却炉前のアーチ付近

北第二棟の端、正門のアーチよりは小さいが、小さなアーチを抜け、左に曲がると焼却炉が見えるというあたり。カラスの鳴き声が聞こえる。

カナ「あーっ！また……！」

カナ、ゴミ箱を放り出して走り出し、アーチ脇に立ってかきかきとちり取りを引つつかんで、そのまま角を曲がりラッカの視界から消える。取り残されるラッカ。

●焼却炉

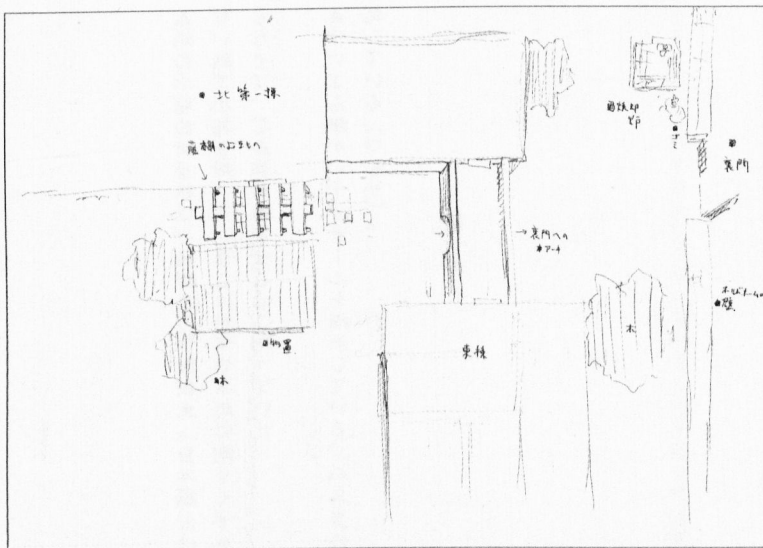
焼却炉のフタは開いていて、数羽のカラスがゴミをつついている。

カナ「コラー！っ！っ！」

箒を振り回して駆けてくるカナ。カラスと格闘。カラスはカナの箒を避けつつ、適当な距離を取って、近くの木立や、焼却炉の煙突の上、塀の上などに退避し、カアカアと鳴き声を上げる。悔しがるカナ。

カナ「くっそー。箒の間合を見切ってやがる」
ラッカ「カッナ」

情けない声を出しながら、ラッカが角を曲がってやってくる。片手でカナが置いていったゴミ箱を引きずり、片



■上面図。前にも書いたかもしれないけど、かなり初期の頃からイメージにあった場所。藤棚と北第一棟内の大きな浴室は、頭の中に絵があるのでどこかで使いたいと思ったけど、出てこなかった。残念。

▲最初、ゴミ袋が濡れている描写がテレビ画面上でうまく伝わらず、チェックの時『ラッカはなんてこんな突なポーズでゴミ袋を持っているのか？』という話になった記憶がある。それでゴミ袋の下側の影の色を濃くして、濡れている感じを出すように修正が入った。

ゴミ袋自体も、僕は何も指定していなかったけど、スタッフ側で、使い捨てではなくリサイクルできる素材だろうという事で、麻袋のようなニユアンスにしてくれた。

手でゴミ袋を抱えている。

カナ「あ、悪い悪い」

ラッカ「ひどいよ」

結局服の裾が汚れてしまい、ベソをかくラッカ。カナ、そんなことにはお構いなしに、ラッカのゴミ袋を受け取る。それを焼却炉に放り込み

カナ「ドア、ちゃんと閉めといたはずなのに、こいつらいつの間にか鍵の外し方を憶えやがった」

カナ、焼却炉のドアのノブ部分のつまみを指先でくると回して見せる。(焼却炉のドアノブは、安物のワインのコルク抜き握りのような形状で、90度回転させるたびに、ドアをロックするための爪が出たり引つ込んだりする仕組みです。後で図解します)

ラッカ「すごい。頭いいんだ」

カナ「感心する事か。あーあーあー、こんなに散らかしやがって」

カナ、地面に散らかったゴミを箒とちり取りで集め始める。

ラッカ「あ、あのさ、カラスの欲しがりそうなものだけ別にしたら

どうかな？」

とおずおずと切り出すラッカに、ゴミを集めながら、淡々と切り返すカナ。

カナ「そんな風に餌付けしてさ、街の外で生きていけなくなっちゃったらどうするのさ」

はっとするラッカ。カナ、ポケットからマッチをとり出し、紙くずを丸めて(新聞は、ガリ版刷りのような、少数の町新聞しかない世界なのでとりあえず避けましょう)火をつける。

カナ「カラスにはカラスのルールがあるんだ。甘やかしちゃいかん！」

カナ、持っていた火のついた紙くずを、焼却炉に放り込む。ぱちぱちと音を立てながら、ゆっくりと火が燃え広がる。いろんな考え方があんなあど感心するラッカ。

カナ「ホラ、ぼーっとしてないで」

カナ、ラッカの脇のゴミ箱を目で示す。ラッカ、慌てて

▲しまった。図解できなかった。バタバタしているうちに、美術監督の片平さんにやっもらってしまった。

▲カナの口調という事を考えたら『生きてけなくなっちゃったらどうすんのさ』と書くのが正しいのかもしれない。シナリオの正しい書式としてはどうなんだろう。

▲まあ、新聞くらいあるだろうけど。実際には段取りがまどろっこしいのでカナが放り込んだ紙屑に直接火をつけてる形になった。

▲よく考えると『いろんな考え方があんなあど』とセリフを言わせずにそう考えている事を伝えるのは無理だから、シナリオでこういう書き方はいけないのかもしれない。

ごみ箱を抱え、焼却炉に中身をあげる。焼却炉の煙突から、煙が上り始める。カナ、その煙を目で追うように、塀の上のカラスを見上げ

カナ「鳥はさ、この世界で唯一、壁を越える事を許されてる、特別な生き物なんだ。もし、アタシ達が鳥にエサをやつて、何の苦労もなく暮らせる場所をつくっちゃったら、鳥は街に住み着いて、多分二度と飛ばない。それは幸せかもしれないけど、………かわいそうだ」

ラッカ「………うん」

ラッカ、少し離れたところからじっと自分を見ている数羽のカラスに気づく。見入られたように、目が離せない。

ラッカ（鳥………。私、どこかで………）

知性があるかのようなカラスの眼。ラッカは何かを思い出しそうになるが、カナが箒を振ってカラスを追い払ってしまふ。

カナ「ええい、もの欲しそうな目で見るな………ラッカも、ぼけっとしてるとフン落とされるよ」

ラッカ「あ、うん」

カナ「いくよ」

箒とちり取り、空になったごみ箱を持って歩き出すカナ。

ラッカ「持つよ」

カナ「（ラッカに箒とちり取りを渡し）サンキユ」

カナ達、再びアーチを抜けて中庭へ。

カナ「寝不足？なんかぼーっとしてるよ」

ラッカ「う、うん。なんか、うまく思い出せないんだけど、怖い夢を見てた気がして………。そのせいかも」

カナ、ゲンコツでガンガン、とごみ箱を叩いて見せ

カナ「じゃ、元気よく起こして大正解だ」

笑うカナ。ラッカ、その後ろでトホ木顔。小声で

ラッカ「そ、それが原因じゃないかな………」

カナ、ポケットから懐中時計を出し、時間を見る。

カナ「さて、メシの時間だ」

ラッカ「その時計、どうしたの？」

カナ「へへへ、いいだろ。そこの物置きでホコリかぶってたの見つ

▲この頃はまだ、鳥の裏設定は厳密なものではなく、僕自身もラッカと同じように「何故こちらを見るのだろうか？」と考えていた。

けて、直したんだ」

ラッカ「自分で？すごい」

カナ「いや全然。こんなの、ゼンマイ取り換えただけだから」

ラッカ「それでもすごいよ」

カナ「（ちよっと照れて）今度大物に挑戦するからさ、こいつはま

あ、肩慣らしってとこ」

ラッカ「大物って？」

カナ、にーっと笑う。

カナ「見る？」

●ゲストルーム

テーブルに食器とティーカップを並べるネムとヒカリ。
ちよっと高級品。上機嫌のネム。水差しとコップを手に、
のれんをくぐって台所からでて来るレキ。

レキ「わ、どうしたの、これ？」

ネム「いいでしょ。アンティークシヨップのおじいさんが欲しがっ

てた資料、揃えてあげたら、お礼にっ

レキ「おお、図書館司書の職権乱用ってやつか」

ネム「人聞き悪いわね。親切よし・ん・せ・つ。ひと月もかかった

んだから。それにこれははちゃんと人が使って手放したも

ですからね」

レキ「やだねえ。年取ると悪知恵が働くようになって」

ヒカリ「クウ、ご飯よ」

●ゲストルーム、ベランダ

クウ「おいつちにーさんしー」

体操をしているクウ（帽子を付けています）。ふと、時

計塔に目をやる。

クウ「ん？」

●オールドホームの時計塔

▲1稿から追加したシーン。このティーセットも間に合わなくてお願いした。水玉模様になっ
ていて、ちよっとびっくりした。

▲このセリフはネムのセリフに変わって『クウ、ごはるん。早くいらっしやい』となっ
ていたが、ものすごく生活感というか、実感があってよかった。

●時計塔内部

時計塔外観。東棟の南端に、一段高い塔のような部分があり、その中庭に向けた壁面に時計がある。いかにもくたびれて、錆びついている文字盤や針。その上には大きな鐘がある。東棟最上階の窓に、階段を上るカナとラッポの姿。

東棟最上階。薄暗い階段の踊り場。電気のケーブルが床をくねって続いている。踊り場からさらに上に続く階段は他の階より幅がなく、途中で天井にぶつかっている。天井のその部分に四角い扉状の天板。天板にはノブと、小窓があり、電気のケーブルはそこを通過して天板の向こうに続いている。

カナ、階段を登りきり、重量挙げの選手のように両手で天板を持ち上げる。重そう。

カナ「んぎぎぎ……」

ぼこつと天板が開く。ぱらぱらとホコリが舞う。咳込むカナ。

カナ「(急き込む音) ……よいしょつ……と。(扉は垂直よりやや開ききつたところで固定される)」

天板の向こうの暗闇に消えるカナ。すぐに黄色い電球の光がつく。

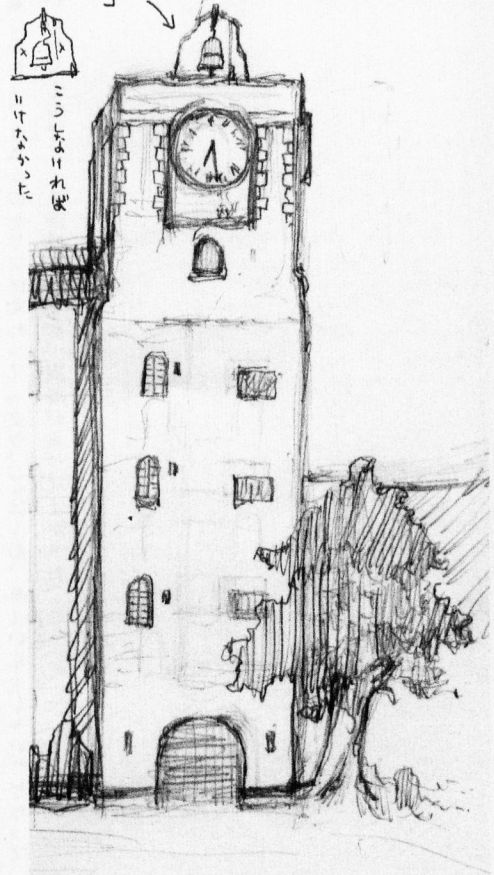
カナ「いいよ」
というカナの声。おそろおそろ天板をくぐるラッポ。

●機械室

屋根裏部屋程度の小部屋。壁の一面を、振り子時計の剥き出しの機械部分が占領している。古びていて、動きそうにない。

質素な木の机と椅子、明かりとりの小さな小窓。床に電気のケーブル、末端は園地用ケーブルのリール。リールについたコンセントに、天井からぶら下がった間に合わ

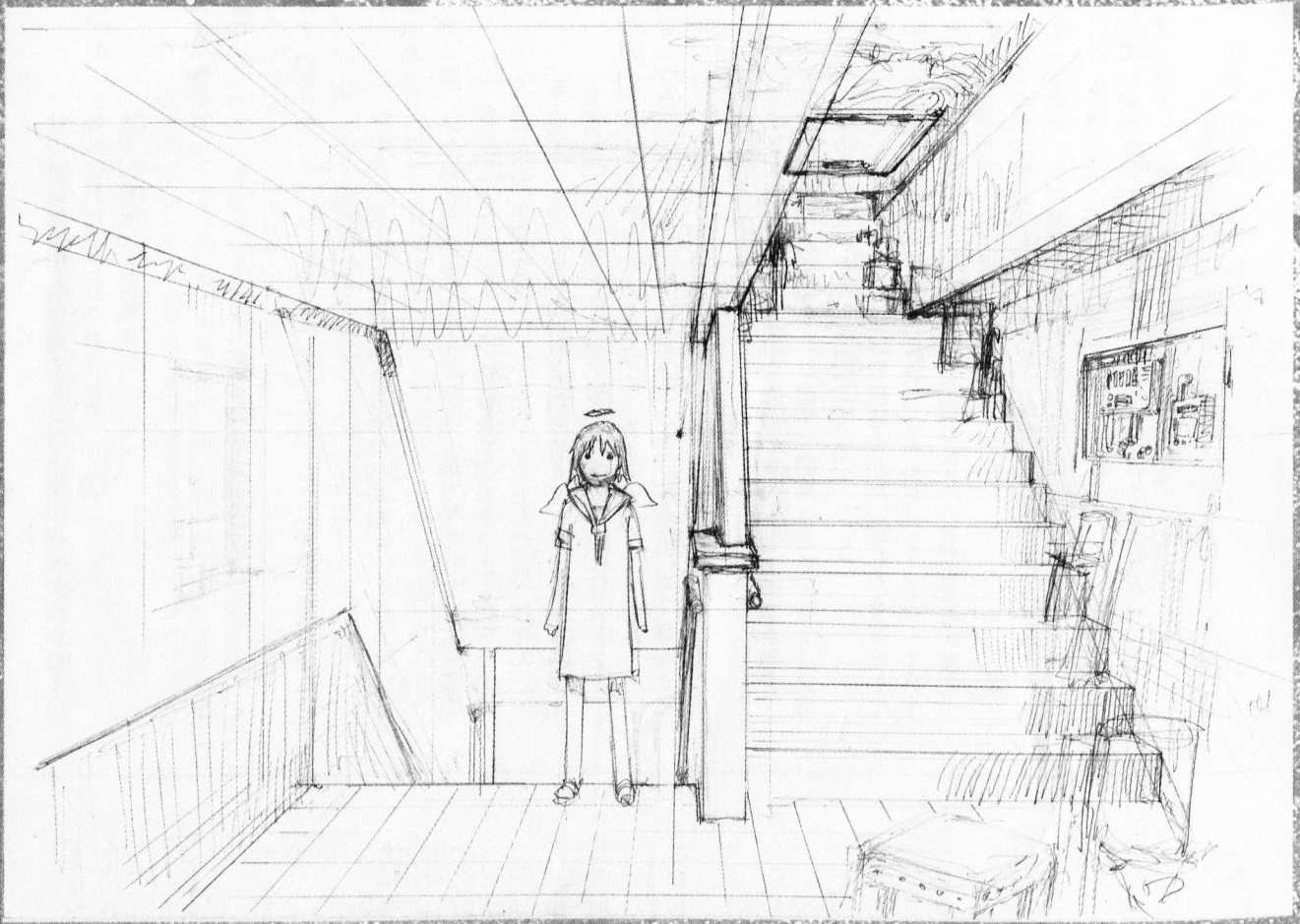
33



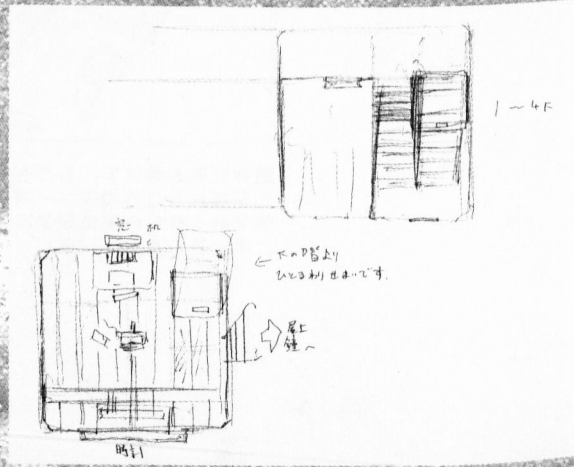
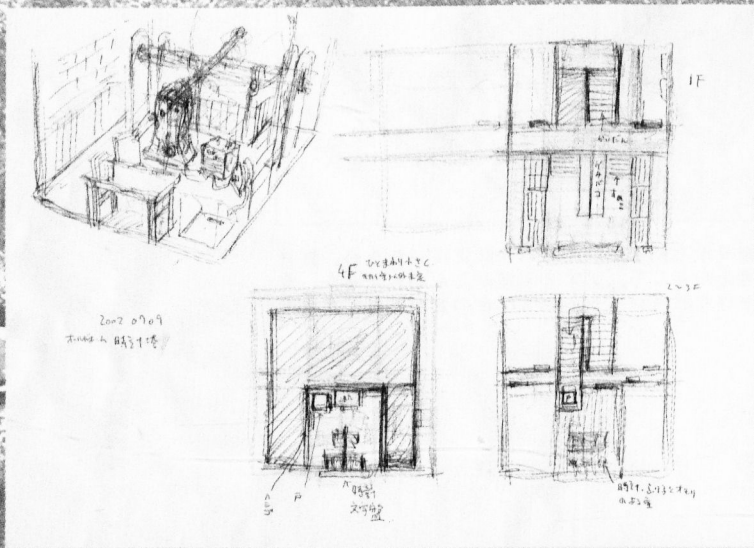
■オールドホームの時計塔に
関するちょっとしたこぼれ話。
東棟の南端に時計塔があるが、僕が描いた設定では細い金属の骨組みで鐘を支えているような構造でした。で、上がってきた線画の美設を見て問題ない……と思ったのだけど、着彩されてみると、将棋の駒のような形のコンクリートの板によって鐘が支えられていた。どうしてそんな事になったかという、基本的な設定では、輪郭で囲まれた部分には何か物体がある、という約束になっていて、線で囲まれているにも関わらず空間として抜ける部分には、小さな×印をつける事になっているのだけど、僕がそれを知らなかったせいで、金属の支柱で囲まれたエリアがコンクリートになってしまったというわけでした。でもこれはこれで特徴的なディテールなのでそのままにしました。

▲時計塔などに設置されている大型の時計や、時計塔自体の内部構造については、とにかく資料がなくて苦労しました。1ヶ月以上ネットや本屋を調べたり、方々に尋ねて回ったり、最後にはカリオストロの城の時にジブリがどこかの時計台に取材にいったと言う噂を頼りに、人づてにジブリの人に聞いてみたりもした。空振りでしたが、結局、ありあわせの資料を元に、想像に想像を重ねてこのような形になりました。でも、多分それほど間違っていないはず……と信じたい。

▲園地用……(汗)。延長の誤記ですね。今気づきました。



■ オールドホームの時計塔内部。美術監督から外観と内部の広さの感じにやめる傾向がある事に気づいて反省。



せの裸電球と、発電機のような小型の機械が繋がれている（これは床に置かれている）。
カナ、ちよつと自慢気に

カナ「秘密基地みたいだろ」

ラッカ「うん。すごい。……（壁一面の歯車を見て）まさか、これを直すつもり？」

カナ「まさか。こいつはもう死んでるし、一人じゃ手も足も出ないよ。アタシが直したいのはコレ」

カナ、足下の発電機のような機械を指す。

ラッカ「これは？」

カナ「昔、誰かがこの部屋に住んでいて、振り子の代わりに、電気歯車が回るように、この時計を改造しようとしたみたいなんだ。誰だか知らないけど、たいしたもんだよ。ほとんどでき上がってる。錆びた部品を取り換えて、モーターがちゃんと回れば、上の鐘だって鳴らせるかもしれない」

ラッカ「へえ……。その人も灰羽だったのかな」

カナ「どうだろう。図面と、作業メモがあったんだけど、ほんとに機械の事しか書いてないんだ。名前も、何年前の事なのかも分からない」

カナ、机の脇に積まれた数冊の本の一番上の本を開き、挟んであった図面を取り出す。図面は古く、カナは大切にそうに、それをそつと机に広げる。

カナ「ここで生まれてすぐ、全部の部屋をかたづけしから探検して回ってさ、最後にこいつを見つけたんだ。……なんていうかさ、アタシにとつては宝の地図なんだ。これみたら、誰だって後を継いでやりたくなるよな」

ラッカ「それで時計台に？」

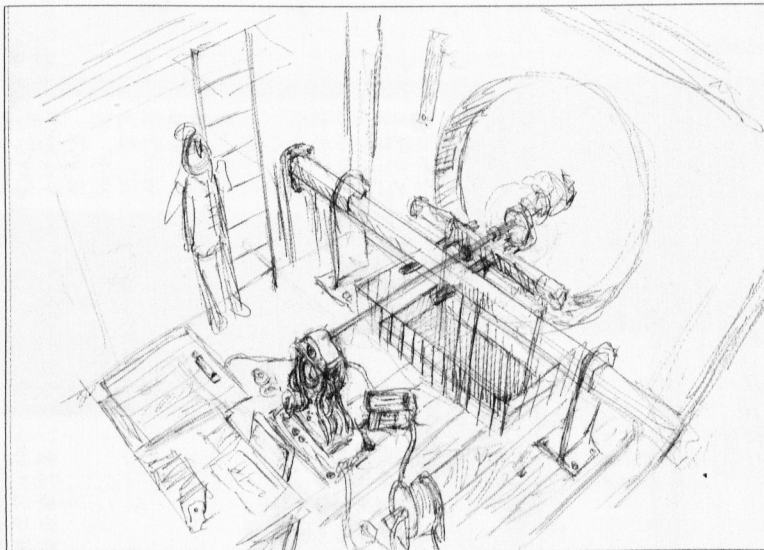
カナ「まあね。まだ見習いもいいとこだけど」

ラッカ、ちよつと感動して

ラッカ「直るといいね」

カナ「ああ……。あーっ！っ！そうだと仕事！！」

● ゲストルーム



■時計塔の機械室。もともと振り子で動いていたという設定にしたため、振り子が揺れるためのスペースを考えたりして、ますます頭がこんがらがった。電気で動く時計の機械部分は、手作り柱時計キットかなにかの説明書を参考に考えました。

朝食の風景。いつもよりちよつとだけ品がある感じ。ネム、高級茶器でお茶を入れている。

ネム「……それだね。お茶もちよつと奮発したのよ。心して飲んでよね」

レキ「へー」

ヒカリ「うん、いい香り」

レキ「やっぱ高級品はちがうねー」

ネム「なによ、文句言うだけ言って」

レキ「ハイハイ」

クウ、両手をばんと合わせて

クウ「いただきますーす」

かすかな食器の音。和やかないい雰囲気。

ネム「なんか、落ち着くわねえ」

レキ、手にした丸パンをひとちぎりして口に運びながら

レキ「ほんと、朝のひとつきってのはこうあるべきだよな」

ヒカリ「やっぱお茶がいいと……」

バアン！とドアが勢いよく開き、カナが飛び込んでくる。

ものすこい勢いで食卓に駆け寄り、バスケットの丸パンをひとつ引つつかんで口にくわえ、3つほど、肩からたすき掛けにした鞆に無造作に突っ込む。くわえていた丸パンを無理やり口にねじ込み（ほったがパンの形に膨らむ）、手近にあった（ヒカリの）カップをひったくってズーッと爆音を立ててお茶を飲み干す。ネム、声にならない悲鳴。あっけに取られる一同。

ラッカ、息を切らせて駆け込んでくる。

ラッカ「カ、カナ……」

カナ「ラッカ、メシ！（むーむくむくぐらいの発音でもよい）」

カナ、ラッカにパンを放る。受け取りそこねてあわあわとお手玉してしまうラッカの襟首をつかんで、カナ、戸口にすつ飛んでいく。

ラッカ「あーれ……」

というラッカの悲鳴が急激に遠のきながら残響する室内。

▲会話が長すぎたので、本編ではコンパクトになっている。

▲ここも何か猛烈に細かく指示している。完全に映像で頭に浮かんでしまっているシーンはどうしても説明が無駄にくどくなってしまう。

▲あーれー、って……。いきすぎ。筆が滑った。本編ではちゃんと普通に悲鳴になった。

数秒前までの優雅な雰囲気は微塵もない。

空のカップの前で硬直するヒカリ（眼がメガネの反射で見えないギャグ顔）。口の中のパンをしゃっくりのように飲み込むレキ。震えているネム。我関せずという感じで、もぐもぐ飯を食い続けるクウ。

レキ、ぼつりと
レキ「なんだありや……」

● オールドホーム正門。

いつもの正門の大アーチの中。出欠表の下に立て掛けられた自転車。カナ、全力で駆けてきて、自転車を引っかけ、そのまま押し駆けしつっひらりと飛び乗る。

ラッカ「待って待って!!」

遅れて駆けてくるラッカ。カナ、速度を緩めずアーチを駆け抜ける。一瞬振り向き

カナ「飛び乗れ!!」
ラッカ「無茶な!!」

慌ただしく出欠表を直し、カナを追うラッカ。走って門の向こうへ。

● オールドホーム前の畦道

畦道の向こうに、橋が見え、その向こうにオールドホームの外堀とアーチが見える。橋を越えて走ってくる自転車。畔の影に一瞬隠れ、すぐに畔を登りきってそのまま漫画ノリでジャンプし、川沿いの道に砂煙を巻き上げつつ前輪から着地。サスもないのにたわむフレーム。そのまま疾走。立ち漕ぎのカナとカナにしがみついで目を回しているラッカ。

ラッカ「やべととやべとやべで!!」

カナ「喋ると舌噛むよ!!」

ラッカ「もう噛んでうら（語尾、舌を噛んでいます）」

▲灰羽の製作中は、PencilのPencilという折畳みの自転車でスタジオに通っていた。片道30分程度だったろうか。いい運動になった。Pencilは2004年に自転車から撤退したそうですね。残念。

▲このシーン、絵がとても良かった。

● 街。中央広場へと続く階段

幅の広い、緩やかな階段。朝のさわやかな街並み。階段上の方からガゴガガ、という騒音。通行人がなにげなく顔を上げ、ぎよつとした顔になる。

ラッカを乗せたカナの自転車、ものすごい勢いで階段を駆け降りてくる。ただでさえポンコツなので、階段の段差のせいで今にも分解しそうなほどガタガタと揺れている。慌てて飛び退く通行人。その前を走り抜ける自転車。

カナ「どけどけどけどけー！」
ラッカ「やーーーーー」

悲鳴が通行人の前でドップラー効果で低くなり、遠ざかってゆく。

● 街。中央広場。時計台前

時計台を見上げる構図。塔の側面に工事中のようにやぐらが組まれている。塔の1階、入り口脇は、ガラスのショーウィンドウがあり、時計が展示してある。時計店の看板。

ドアには『CLOSED』の札。

キキキキ、と自転車のブレーキの音。がしゅつと自転車を立てかける音。カナ、ドアの前へ。

カナ「ぎりぎりセーフ、かな？」

カナの後ろで、ふらふらになっているラッカ。昔の漫画で、殴られた時に土星やヒヨコが頭上を回るみたいに、光輪がよたりにながら回っている。

カナ、『CLOSED』の札をつまみ、ドアノブをひねる。鍵がかかっている。

カナ「ラッキキ。珍しく親方も遅刻みたい。裏から回ろう。これならあんなに飛ばす事、全然なかった。ハハハ」

カナ、頭を掻きながら、元気よく歩み去り、塔の角を曲がる。ガーン、という表情で立ち尽くすラッカ。

▲長すぎたのでてカット。

▲ここも、ギャグ色が強すぎた部分、抑えられている。

▲『全然』が、話し言葉としては不要だったかもしれない。声で聞いて少し思った。



■ 試行錯誤の末の時計台。斜めから描いてくれないと奥行きが分からない、言われた。確かに。でもパースを取りながらデザインを考えるのはものすごく疲れるので、つい平板な構図にしてしまう。工事中というのをどう見せようか悩んでいて、ネットで本当に工事中の時計台の写真を見つけた時は『やった!』と叫んでしまった。窓から反対側の窓まで鉄棒を通して、足場を作ったりしていました。

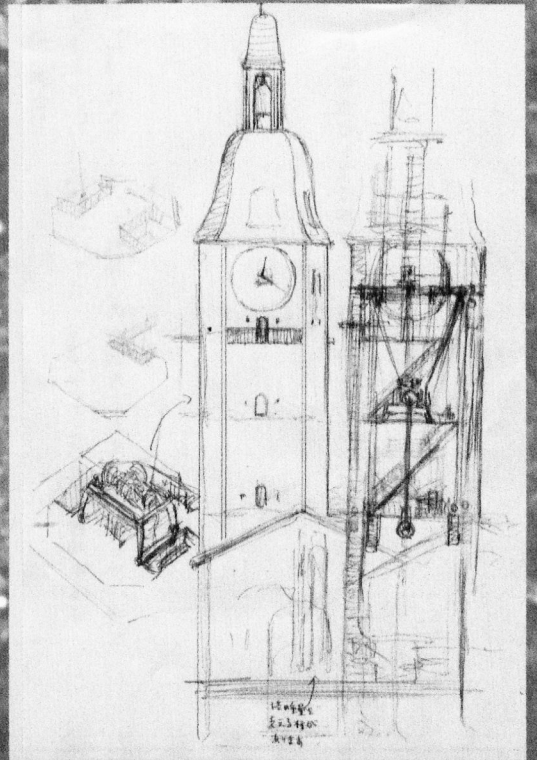
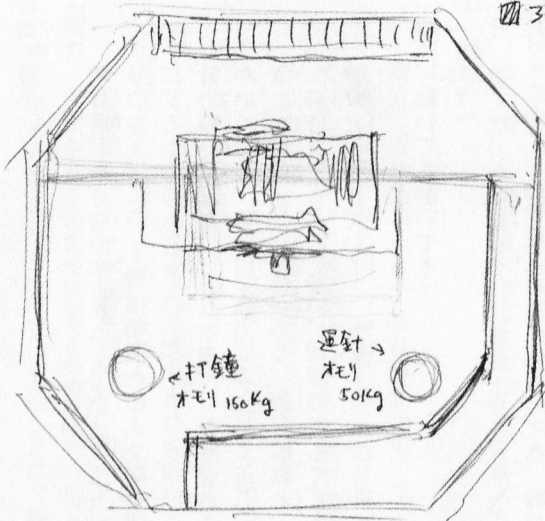
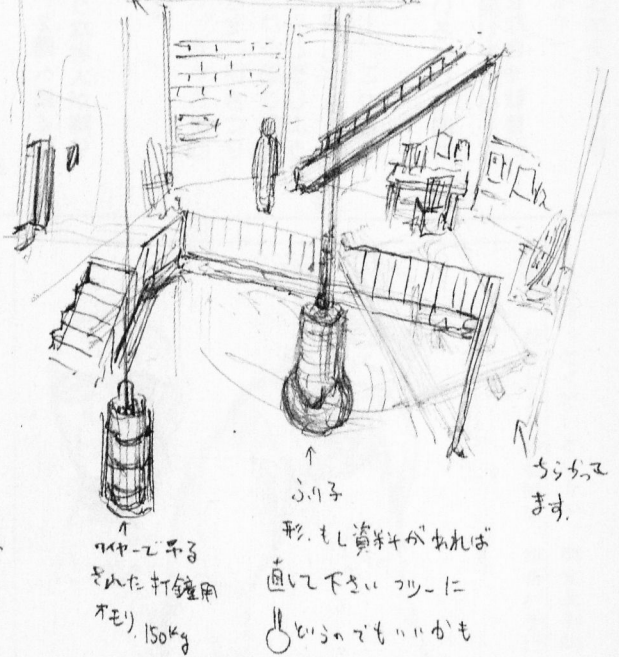
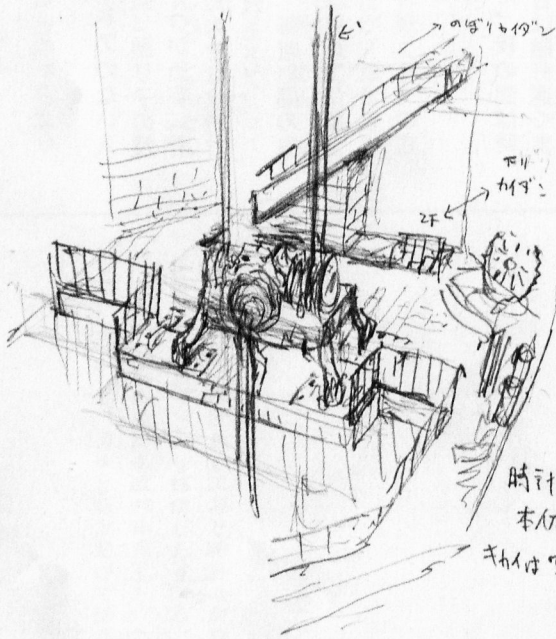
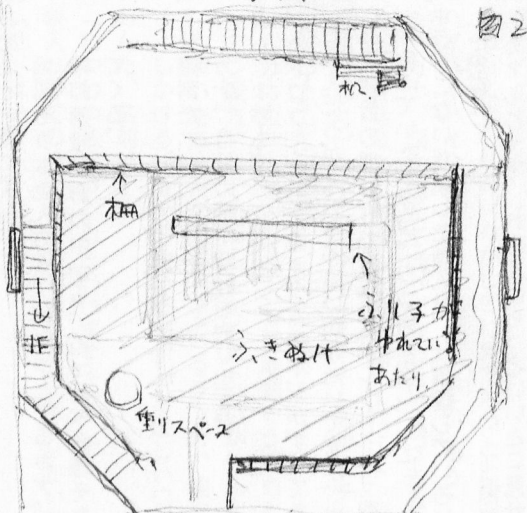


図3F



→ 3F

図2F

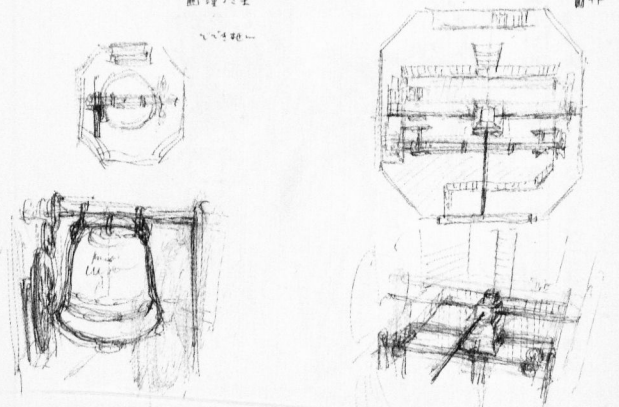


■時計台の各階の図解。鐘楼は出てこないのだけど一応簡単なメモだけ。時計自体は、わりとシンプルな作りになっている。つつい巨大歯車をイメージしてしまうのは、やはりカリオストロの城のイメージが強烈だからだろう。あれは水門の開閉と連動している事もあるのかもしれないけど、一種のファンタジーという事なのかなと思う。

でも、でっかい歯車が全然ないのは寂しいので、時計の機械部分を大きめにしたり、鐘を打つために大きな歯車が必要という事にしたりしている。

図4F

図4F



●時計台、裏手

時計塔。やぐらの下をくぐるようにして、ドアのない入り口を入ると、1階は物置きのような空間。振り子の錘にするための小石を入れた大きな箱がいくつもある（時計の振り子と鐘の振り子用）。分解された大きな柱時計がいくつつか。時計店と繋がっていると思われるドア。壁に2階へ続く階段がある。天井は高く、薄暗い闇の中に溶け込んで見えない。歯車の回るくぐもった音がぼんやりと反響している。

カナ「おっ、動いてる動いてる」
ラッカ「えっ？」

カナ「今、古くなった部品を入れ替えてるとこなんだ。夜の間は時計を止めて、歯車を入れ替えたりしてる。昨日は随分遅くまで作業してたから……そうか、それで親方も寝坊したんだな」

親方「おめえと一緒にすんな」

偏屈そうな老人の声。ピクっとするカナ。2階へ続く階段の薄暗い影の中から、ぬっと不機嫌そうな老人が降りてくる。

親方「7分遅刻だ」

カナ、自分の懐中時計を取り出す。

カナ「よし、1秒もずれてない」

親方「バカヤロウ！ てめえのオツムのネジがずれてたらどうしようもねえだろが（べらんめい調みたいですが、江戸っ子みたいな巻き舌の喋り方ではないです）！……………あー、こっちは（もっていたパイプでラッカを指し）？」

カナ「ホラ、こないだ話した新入り。仕事探していろいろ試して回ってるよ」

親方「ああ？ んじゃあ、おめえはもつといいとこ見せなきゃ駄目だろうが！」

カナ、首をすくめる。



■親方。厳しそうだけど実はいい人。前掛けに工具が入るポケットがあるのだけど、省略されてしまった。こんなごちゃごちゃしていたら、確かに動かすのは無理だろうと思う。

親方「時間を守らねえ時計屋で誰が時計を買んだ？おめえはボロ着た服屋で服を買うか？下戸の酒屋で酒を買うか？」

カナ「酒はどのみち買えな……」

親方「うるせえ！ヘリクツぬかしてねえでとつとと店開けてこい！」

カナ「ハイハイハイ分かった分かりましたよ、もう」

カナ、頭を抱えてほうほうの体で逃げ去る。

親方「あと、自転車あ、ちゃんと裏に回しとけ！」

カナ「（遠くから）はい………あつ！チクショウ！上から見てやがったな」

カカカ、と楽しそうとも意地悪そうともとれる感じで笑う親方。すぐ脇で、どうしていいか分からず、引きつり

笑いを浮かべて固まっているラッカ。親方、ラッカに話しかける。カナの時よりはずっと優しい口調。

親方「あんた、名前は？」

ラッカ「わっわっ私、ラッカといます！」

親方「新入りってのは、オールドホームの新入りかい？」

ラッカ「は、はい」

親方「………街には慣れたかい？」

ラッカ「うーん………す、少しは」

親方「………カナは、良くしてくれてるか？」

ラッカ「………一瞬考え、すぐににっこりして」

ラッカ「はい」

親方「ふーん………」

親方、階段の手すりに寄り掛かって、店に続くドアの方を眺めながら腕を組む。気難しそうな草だが、顔は笑っている。パイプが時間を刻むように規則的に揺れている。

ラッカ、悪い人じゃなさそうだ、と思ひ、少し緊張を解く。

ラッカ「私、なにか手伝います」

親方「ああ、じゃあ、上の階の掃除を頼もうか。何しろここんとこ

ばたばたして………」

ドアが開き、カナが首を出す。

カナ「親方、アタシはこのまま店番するの？」

親方「いや、おめえは上行って片づけもんしとけ。散らかっちゃま

つ

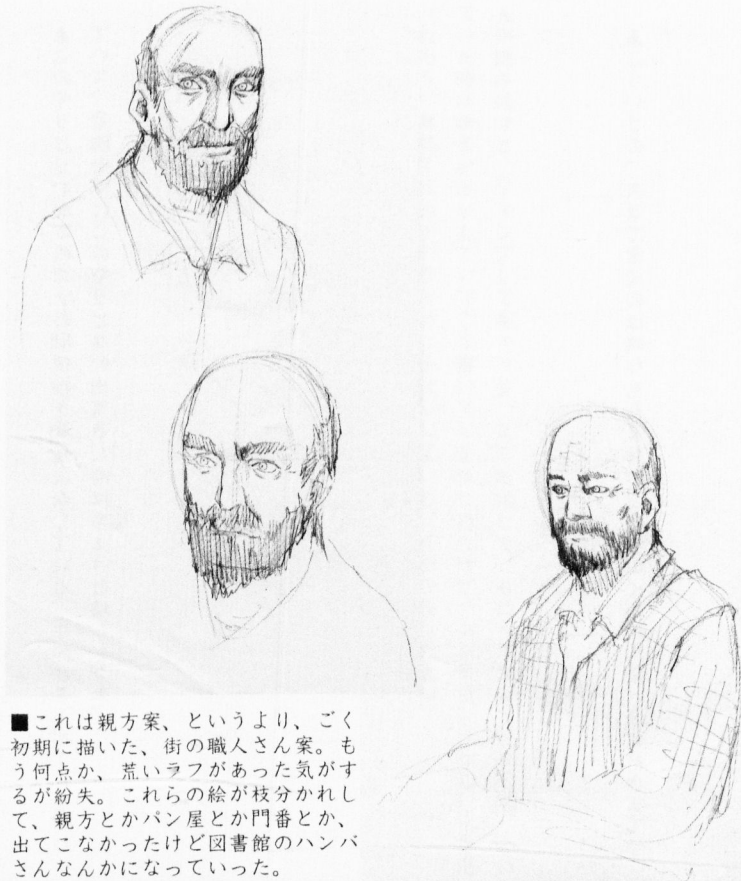
つ

つ

つ

つ

▲ちよっとくどいというか、職業差別的な観点から大丈夫か？というところを採めた部分。親方とカナの会話は、情景が手に取るように浮かんで、書いていて楽しかった。



■これは親方案、というより、ごく初期に描いた、街の職人さんだった。荒いラフな絵が、このパン屋と図書館の雰囲気をよく表現している。親方案は、このパン屋と図書館の雰囲気をよく表現している。

▲時計屋は、時計台と工房と時計店がひとつになっている。カナが店番をして、親方が工房で時計を作ったり修理したりする。もちろん、カナの他に何人か徒弟はいるのだから（時計台の時計も改修中だし）、ここでは不要なので、カナ一人の日、という事にしている。でも、カナと親方だけで切り盛りしている方が物語としてはぐっとくるものがある。

て手がつけらんねえ」

カナ「へーい」

カナ、親方の脇を抜け、階段を駆け登る。

カナ「ラッカ、行こ」

親方「(ラッカを見て) わかんない事があつたら、カナに教えても

らいなさい」

ラッカ「はい」

カナ「まったく他人にばっか愛想いいんだから」

老人「見込みがあるから鍛えてやってんだ、文句言うな」

カナ「……………だとさ」

と、肩をすくめ、苦笑いするカナ。でも少し嬉しそう。

●時計台、2階

高い天井。塔のフロアの中央は吹き抜けになっていて、

3辺が通路のようなフロアになっている。吹き抜けの空

間を大きな振り子が行ったり来たりしていて、振り子に

当たらないように、中にもやぐらが組まれている。フロア

アが高いため、実際の3階程度の高さ。壁には上に続く

階段。

ラッカ「うわあ……………」

カナ「うわあ」

巨大な振り子に感動するラッカ。部屋の汚さにあきれる

カナ。部屋は、壁中に乱雑に図面が貼り付けられ、やぐ

らを組むための木材や、時計の部品、工具などが乱雑に

散らばっている。壁に、作業服や、前掛けが何着か吊る

されている。片隅の机に大量の酒瓶と汚れた食器が載っ

ている。

カナ「やーれやれ。歯車ひとつ入れ替えるたびにこれだもんな。時

計が酔っぱらわない事を祈るよ、ホント」

ラッカ「夜食？」

▲このやりとりが親方のカナの関係を簡潔に表している。無心にキーボードを叩いていて、意識せずにこのやりとりが出てきた時はちょっと嬉しかった。

▲こういうの、文章で書くのは楽なもんですが、絵で描くのは大変、お疲れさまです

カナ「夜は結構な人数が作業してるからね。しっかし、時間にうるさい割に、こーいうところはズボラなんだよな」

ラッカ「壁の前掛けをひとつとって、身に付けながら」

カナ「まずはゴミから。あーあ。今日はゴミの日だ」

ラッカ、笑う。

●時計台、2階

壁の図面以外、あらかた片づいた室内。ラッカ、テーブルの最後の酒瓶を袋にがらんと入れる。

ラッカ「カナ、布巾とって」

カナ「はいよ」

掃除が終わわり、前掛けを壁に戻しているカナ。バケツに引っかけた布巾をつまんでラッカに放る。ラッカ、ジャンプしてキャッチ。

ラッカ、テーブルを拭きながら

ラッカ「みんな、働いてるんだね」

カナ「今さらなんだよ」

ラッカ「ねえ、灰羽はどうして働くのかな？」

カナ「はあ？義務だよギム」

ラッカ「そうじゃなくて……」

カナ「ああ……。そうだな……。 (かるくせき払い) アタシ

達はさ、この街で、すこい守られてるじゃん」

ラッカ「うん。……そうかもね」

カナ「それってヤじゃない？なんていうか、半人前扱いみたいで。

だから借りをつくらないように働くんじゃない？」

ラッカ「そっか……。 (ちよつとほほ笑み) カナらしいな」

カナ「はーん。そういうえば、昨日レキんとこで仕事手伝ったんだっ

け？」

ラッカ「うん……。レキもヒカリもカナも、みんな自分のやりたい

事が仕事になってるよね。私、何していいか分からなくて……」

カナ「なんもなかったらさ、とりあえずレキントコ手伝えは？あそ

▲こーいう人っていますよね。

▲今読み返すと、ジャンプしてキャッチ、まで指定しているのってちょっと不思議、書いていた時は情景が浮かんでいてこー書いてしまったのだけど、コンテマンはなんだ？と思ったらう。本編ではカナがラッカに手渡ししている。そりゃそうだよな。

「この手にかかるチビが多くていつも人手不足だし、レキは面倒見いいしね」

ラッカ「うん……」

カナ「ああ、でもがんばらねえと、手伝うつもりが、面倒なチビが一人増える結果になったりして（からかい口調で）」

ラッカ、ちよつと不安そうに顔を曇らす。

ラッカ「そ、そうかな？」

カナ、机の上の散らかった書類をとんとんと叩いて揃え、振り返る。ラッカの不安そうな顔を見て、慌ててフオロ―するよう

カナ「ああ？いや、アタシが言いたかったのはレキは親切すぎるって事。ラッカはまだ来たばかりなんだから気にする事ないって。今日だって頑張ってるじゃん」

ラッカ「うん……」

しよんぼりするラッカ。カナ、悪い事を言ったかな、という顔で頭を掻く。ふと何かを思いつき、明るい声で

カナ「そうだ。上に行かない？」

●時計台、3階

階段を登ると、2階と同じ間取りの回廊のようなフロア。フロアいっぱいには、大きな時計の部品がある。床に厚みのある布が敷かれ、その上に新品の大きな歯車が置かれている（大きいといっても「メートル程度です」）。壁には古くなった歯車が数枚立て掛けられている。時計の機械部分はさらに上。複雑な歯車が絡み合っており、そこから四方に、水平に鉄柱が延びている。鉄柱の先は文字盤の裏側の中心。鉄柱が回転して針を回している。

カナ「こっちこっち」

カナ、テラスに続くドアを開ける。風が吹き込む。

ラッカ「ひゃっ」

●時計台、テラス

▲ラッカはまだ不安定。元々の性格もあるのだろうけど。

▲まどろっこしく説明していますが、要するに時打重錘振子式四面時計というやつです。

強い風が吹くテラス。すぐ上が文字盤。テラスからは街を一望できる。カナ、風に髪をなびかせ、気持ちよさそうに目を細める。

カナ「いい眺めだろ」

カナ、ラッカを振り返り……あきれ顔。ラッカ、こわばった顔でじりつとあとずさる。

カナ「平気だって、手すりあるし」

ラッカ「う、うん」

ラッカ、ドアノブにすがりつくようにして、おそろおそろ一歩テラスに踏み出す。

カナ「ここが街で一番高い場所だから、ここが平気ならあとは怖いもんなし」

ラッカ「……うん、平気……じゃないかも」

カナ「下を見るからだよ。遠くを見な」

ラッカ「と、遠く、遠く、一番遠くは……壁」

ラッカの視界。どちらを見ても、壁が地平線を隠している。

カナ「そうだね。この街はすり鉢状になってて、ここが一番低いんだ。だから壁の方が高いのかも」

ラッカ「あの壁の向こうは……何があるのかな？」

カナ「……知るもんか。灰羽は壁に近づく事もできないんだ。トーガの他は誰も街に入つてこないし、街の人間も、外には出られない。もし出たら、二度と帰つては来れない決まりになつてる」

数羽の鳥が、遠くを飛んでいる。

ラッカ「……鳥だ」

カナ「うん」

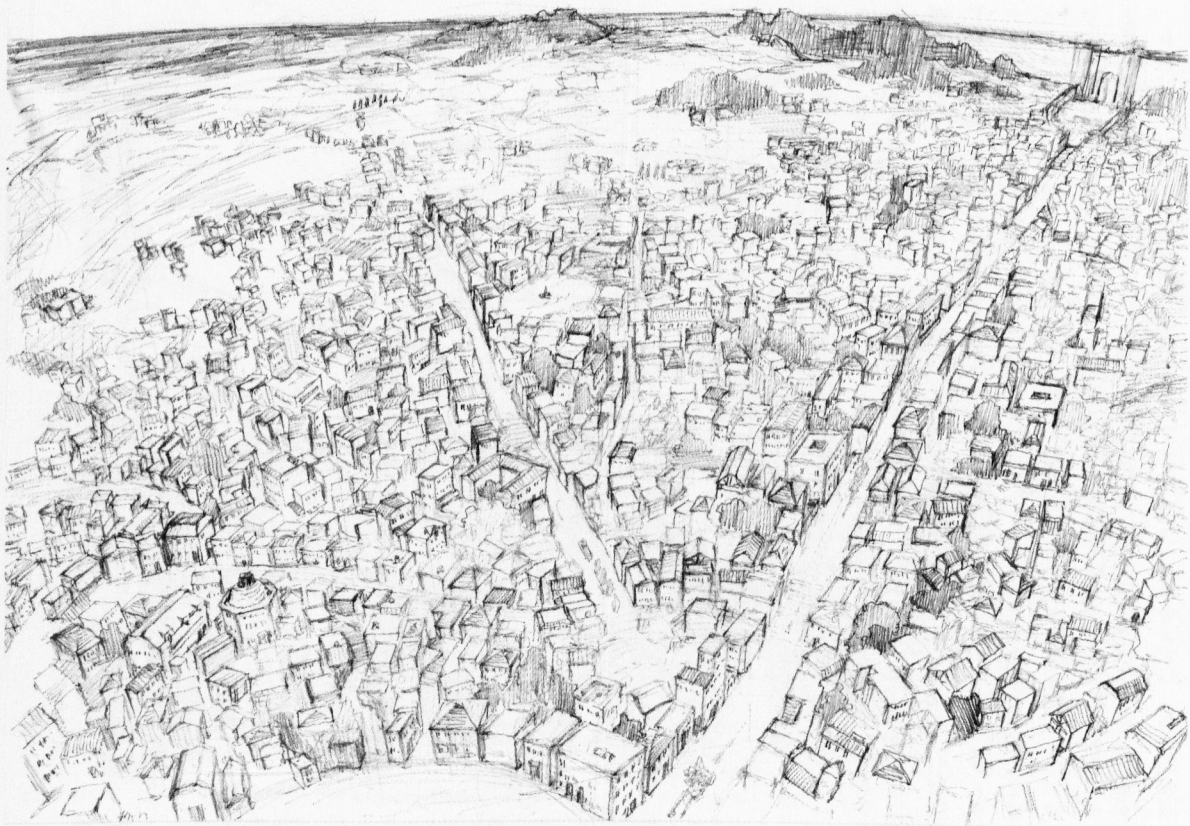
ラッカ「鳥が……壁を越えて飛んでゆく」

カナ「……鳥はさ、忘れ物を運ぶんだって」

ラッカ「忘れ物？」

カナ「アタシ達が繭に入った時に、忘れちゃった何か。……（自分の言葉のちよつと詩的な響きに照れ笑い）なんか、そういう言い伝え。鳥は壁のこつちと向こうを歩き来するから、そ

▲僕も高いところはやや苦手。コンベンションでアメリカに招かれた時、世界で一番目に高いビル（だったかな？）に登って、展望台でへっぴり腰になりました。



■時計台からの眺めを描いて、と頼まれて描き始めたものの、これだとちよつと高すぎますね。壁の向こうが見えてしまいそう。でもまあ、街の広がりはこのくらいと考えていました。

ラッカ「……」
んな風に言われんじゃねえの」

ラッカ、いつの間にか高い場所に対する怯えは消え、少し身を乗り出すようにして、ほとんど点のようになった鳥を目で追っている。

カナ「ラッカ？」

ラッカ、はっとして、カナを振り返る。

カナ「平気になった？」

ラッカ「……あ、ホントだ」

カナ「んじゃ、もう怖いもんなしだな！」

ラッカ、笑顔になる。

●時計店、店内

狭い店内。コチ、コチ、コチと針の音が無数に重なって響いている。店中に、時計が並び、カウンターの向こうには、組み立てかけの時計が整然と並んでいる。静かな雰囲気。

親方、カウンターに座り、小さな時計を直している。カナとラッカがドアを開け、入ってくる。

カナ「掃除終了！ ついでにこれ」

カナ、ドアにばん、と張り紙。

親方「なんだ？」

『部屋はきれいに』と書かれた張り紙。

親方「余計なお世話だ」

カナ「あとは？」

親方「今日はもういい」

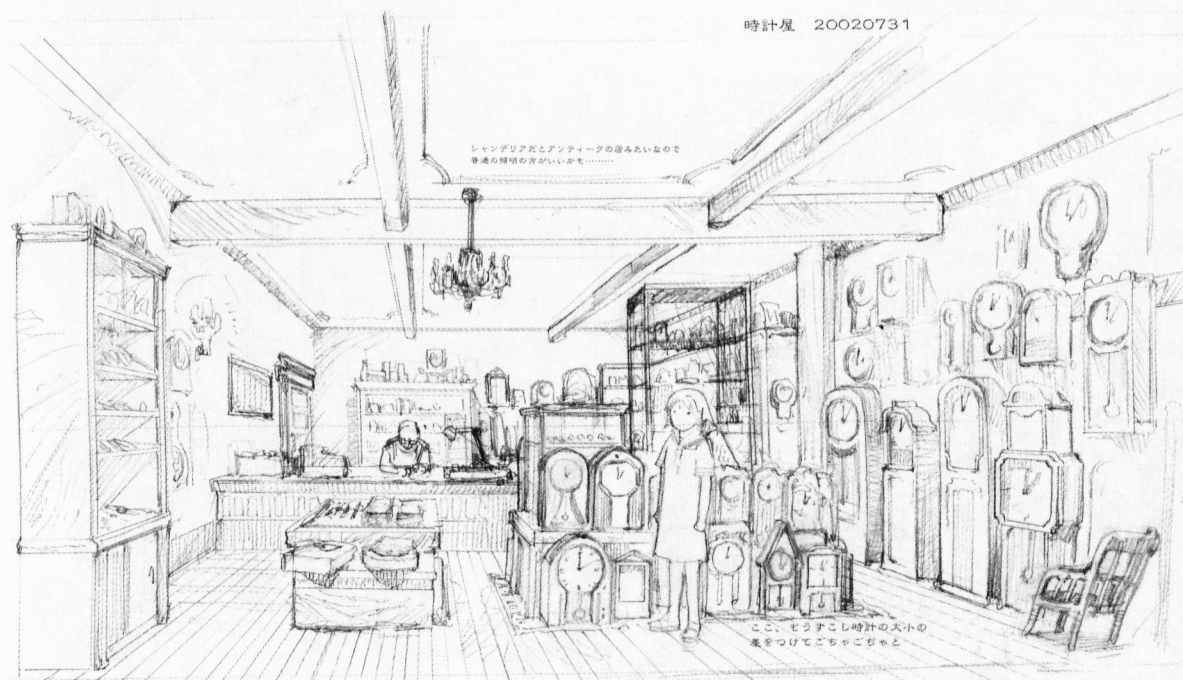
親方、カウンターの後ろの作業台に置かれていた大きな道具箱をカナに渡す。

カナ「なにこれ？」

老人「遅刻した罰だ。お前んとこの時計塔の修理な、あれ、お前がやれ」

カナ「（目を丸くして）……いいの？」

時計屋 20020731



■時計店内部。イメージはあったのだけど、なかなかうまく描けなかった。時計がたくさんあって大変……。でも本編では時計が並んでいるあたりは画面上にはほとんど出てこなかった。残念。シナリオ中に、カウンターの後ろにも作業台があると書かれているのに、設定の方には戸棚を置いてしまった。僕のミス。正式な設定では机が追加されている。

老人「ああ、わしらはあんまり灰羽の生活に関わりすぎちゃいけねえからな」

カナ「……………やった」

と叫んで道具箱を手に走り出すカナ。ラッカの事を忘れてる。

ラッカ「あ、待って」

後を追おうとするラッカ。あわてて振り返り親方に挨拶。

ラッカ「今日はいろいろお世話になりました」

親方、少し心配そうに

親方「なあ、あの子は、カナは、どっかに行っちまうつもりなんか？」

な？」

ラッカ、驚いて

ラッカ「え？あ、いえ、私はカナの代わりに働きに来たわけじゃなくて、私、新入りだからみんなが働いてるのを見学させてもらってるんです。カナは、ここ、大好きだと思えますよ」

親方、少し安心した風に

親方「そうか。いや、あんたらはそんな羽なんてついてるから、ある日ふっと、どっかに飛んでっちまいそうな気がしてな」

ラッカ、微笑んで

ラッカ「この羽、えらそうについてるだけで、全然飛べないんですよ」

よ」

親方「そうか……………ならええ」

親方、パイプに火をつけ、笑う。安心した風にも、寂し

そうにも見える。

●帰り道、夕暮れ

オールドホームへと続く帰り道、でこぼこの畦道を自転車の二人乗りで家路に急ぐ二人。今度はラッカの運転。

カナ「ラッカ、もうちょっとスピードでない？」

ラッカ「駄目！安全第一」

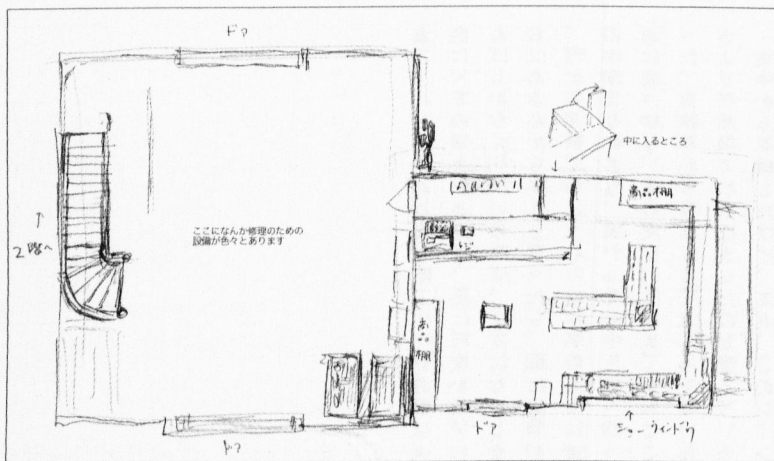
カナ「ちえ……………」

カナ、待ち遠しそうに、ひざの上の道具箱を撫でる。

ラッカ「今日はありがとうね」

▲このシーンは全体的に好評で良かった。普段僕が描いたものに関しては欠点の指摘しかない上田さんが『なんだよ、ちょっといい話だな…………』とかぶつぶつ言っていたのをかすかに憶えている。

4話だけ、どうしても仕事が終わらなくてアフレコに立ち合えず、(当時のカレンダーを見るともうテクノライズの打ち合わせが始まっている)V編の時に観て、カナがいなくなる事を心配する親方の声が少し気弱すぎかな、と思ったが結果的にはそれが良かったのかもしれない。4話は全体を通してキャラクターの感情がはっきりと出る演出になっていたと思う。僕もそう意図してシナリオを書いたので、歯車がうまくはまったような気がして嬉しかった。最初、コンテをもらった時に、監督、助監督から、事前に『ちょっと絵に癖はあるけど、これはいいコンテだから』と前置きがあったって手渡されたのだけど、確かにちょっと前衛的な、というかガロっぽいタッチの絵柄でびっくりした。でも、仕上がりみてたら、とても良い話数になっていたと思う。未だにコンテ読みは苦手で、意味は分かるけど仕上がりの形が想像できなくて、いつも苦労します。



■うまく入る場所がなくで最後になってしまったけど、時計店の見取り図。元々時計台があり、根元部分を覆うように工房ができて、その脇に時計店が造られたのだろうか。変な構造。美術監督からも『変だよ』と言われた。でも、間取りを考えるために色々な時計台を調べている時、こんな感じで倉庫のような建物の屋根からよっきり時計台が続いている建物は一応実在してはいた。ただし、もっと小さな時計台だったけど。

カナ「ああ……………。参考になった？」
 ラッカ「うん。いろいろ発見があったよ」
 カナ「発見？」

ラッカ「人は見かけによらないなあって」

カナ「ああ、親方ね。だまされんなよ。客には愛想いいんだ。ア

タシには小言ばかり」

ラッカ「ううん、ちがくて」

カナ「何？」

ラッカ「いいや、なんでもない」

カナ「変なヤツ」

夕焼けに遠くの街並みが溶けてゆく。カエルの鳴き声

ラッカ「川の匂いがする」

カナ「ん？」

ラッカ「いつか、どこかでこんな風景を見た気がする」

カナ「まーだそんな事言ってる。分かるけどね、そーゆーの。何か

思い出したりする？」

ラッカ「ううん……………。不思議だね。言葉とか、自転車の漕ぎ方と

か、そんな事は憶えてるのに」

しばらく間。

カナ「どうした？」

ラッカ「…………。こう言う気分の時、私は歌を歌ってた気がするんだ。

だから、何か歌を思い出せたらいいのに、って…………。」

●オールドホーム、焼却炉前、翌日早朝

翌日、焼却炉前。相変わらずカラスと格闘するカナ。ゴ

ミ袋を手にとってきたレキとラッカ。

ラッカ「カナ、これお願い」

カナ「くそー。やっと見つけてきたネットなのに一日で破りやがっ

た」

穴の開いたネットを両手で持ち、ふるふる震えるカナ。

レキ「懲りないねえ」

カナ「まったくカラスのやつ」

レキ「いや、アンタが」

▲オールドホームと街を結ぶ川沿いの道は大好きで、つい出してしまふ。子供の頃、仙
 台に父方の田舎があって、夏に何度か遊びに行った。家を出ると目の前は地平線まで田
 んぼしかなく川沿いの道は、夕方になると食用ガエルが大合唱していた。牛乳の行商の
 おばあさんから牛乳を買ったら、脳に衝撃が走って言葉が出なくなるくらいうまかった
 。何かの用事で伯父さんの自転車の後ろに乗せてもらったら、道いっぱい巨大な泥土
 の水溜まりがあり、僕が『真ん中を突っ切って』と頼んだら調子に乗った伯父さんが本
 当に突っ切り、案の定なかほどまで来たところ泥に車輪をとられて立ち狂生してしま
 った。自転車から滑り落ちて泥に足を着いたが最後、どうやっても足が抜けず、でも怖
 さより不思議でどきどきしたのを憶えている。

途中から脱線したけど、まあ、このシーンの川沿いの道は、僕の子供の頃の記憶と重
 なるので好きなのだと思う。

カナ、ネットのアナからレキをにらむ
カナ「にやにおう！」

レキ「うわ、ヤブヘビ」

走って逃げるレキ。後に続いて歩き出すラッカ。去り際
に小声で

ラッカ「がんばれ」

カナ「……………今のはアタシの応援じゃないなあ」

ラッカ、ぶるぶると首を振り

ラッカ「そ、そんなことないよ！（大まじめに）どっちもがんばれ」

カナ「なんだそりゃ！……………あ」

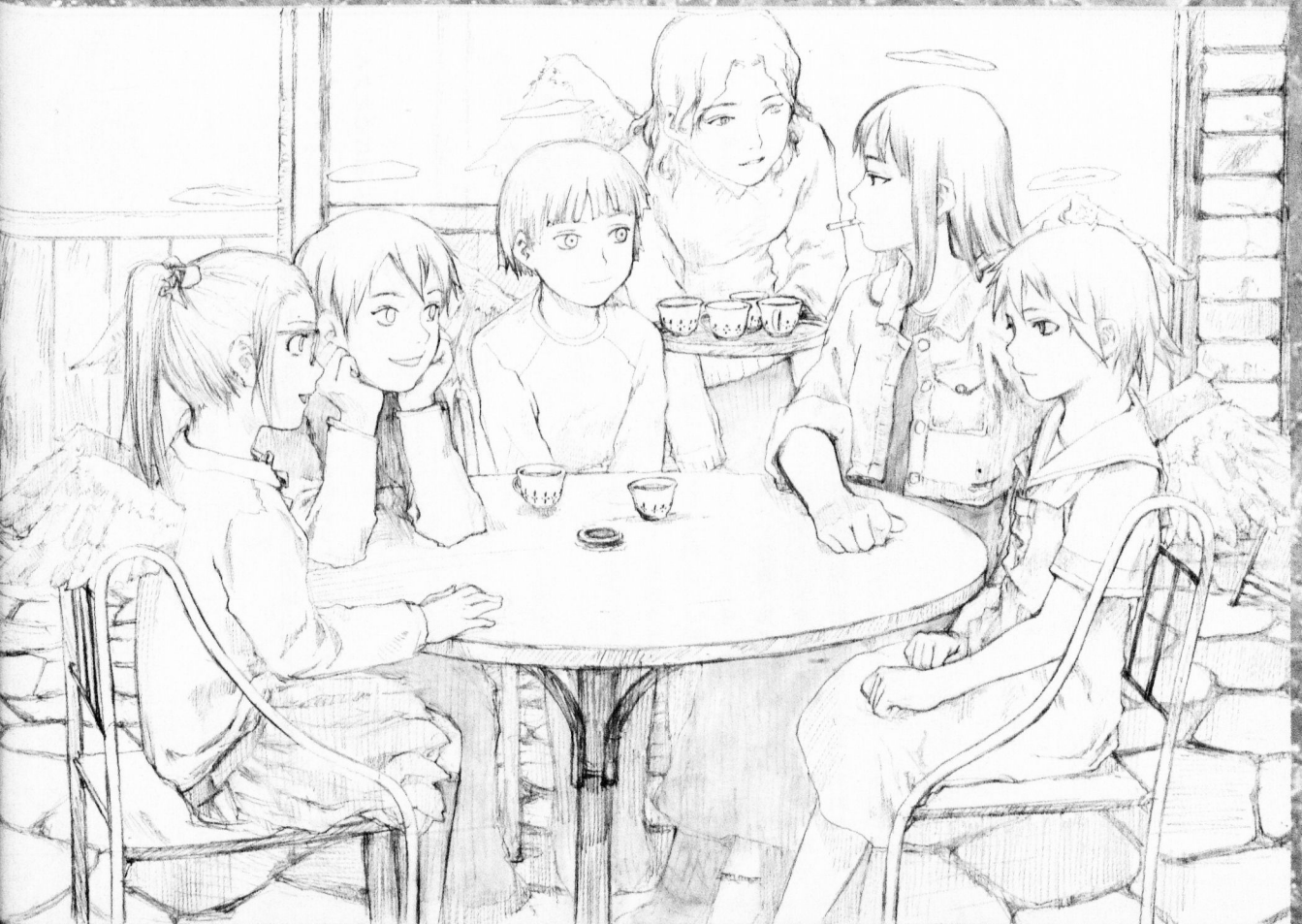
カナの頭にカラスのフンが落ちる。幕。

原稿用紙200字詰め8枚（表紙含まず）

▲結局コント落ち。そもそも、この話数の元となったのは『カナ、カラスが嫌いでゴミ捨て場のカラスと格闘』という程度のメモ書きのようなものだった。よくこれだけ膨らんでくれたなと思う。



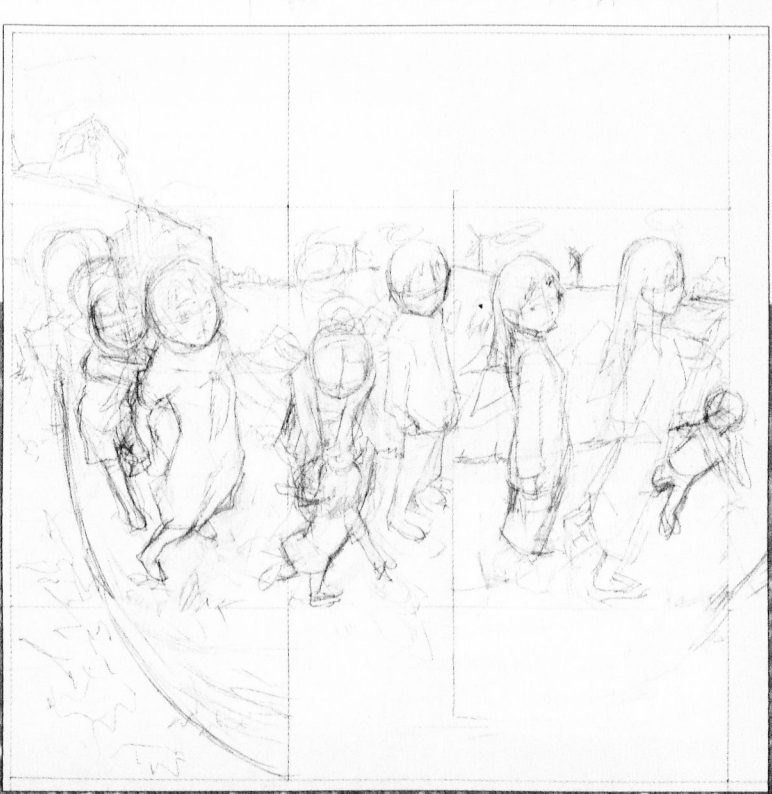
■下はイメージアルバム『聖なる憧憬』のジャケット。上見なるそのラフ。ラッカがよそをしているのが、クリンナップでは修正されている。しかを企んでいるような感じにも見える。色調や雰囲気はすごく気に入っているが、画面上の中央から左に向かって、キャラクターの頭の並びが左下がりになっていて、その流れを受け取る要素がないため、構図がよくない。うまい解決を思いつかなかったのだが、画面左上のドアのガラス部分に白い張り紙か何かを入れれば良かった。





■上は聖なる憧憬のポツ案。CDの大きさを考えたら、ちょっとキャラクターが小さくなりすぎるため。絵自体は気に入っていて、どこかで使いたかったのだけど……。

下はDVDボックスのポツ案。やはり全キャラ出したかった。





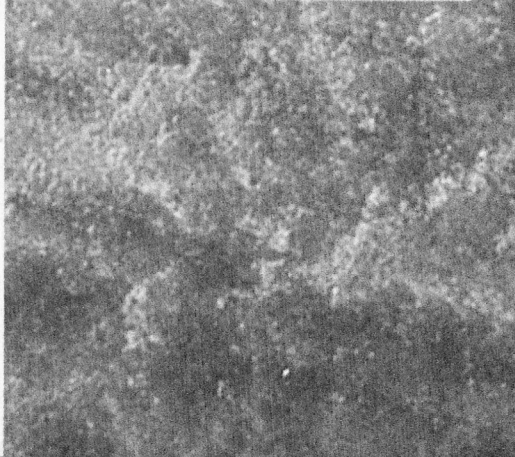


■同人誌2巻の素材。最初にラッカを描いた。その時は横向きて膝を抱えた絵だった。ポーズがいまひちつ気に入らず、顔だけ残して全て消し、今の絵になった。そのあとでキャラクターに合う背景を考えた。左ページがその背景。現在のオールドホームの間取りとは微妙に違っている。





■上は同人誌素材。樹の葉は、今だにうまい描き方が見つからない。輪郭を区切るのではない、鉛筆の濃淡を生かしつつ、厚みのある表現ができるといいんだけど。左は画集に掲載したけど、元々はDVD1巻のボツ案。プロデューサーの上田さん曰く『ぬるい』との事。背景が曖昧だったり、物語性が薄いのが、僕の絵らしくないという事かもしれない。これがボツで、次に描いたラッカとレキが並んでいる絵（脚本集参巻末尾）もボツ。精神的に追いつめられて一晩で描いたのが最終的に採用になった。





灰羽連盟

脚本・安倍吉俊

第05話 図書館・廃工場・世界のはじまり

第8稿 (2002.06.25)

▲第五話。この頃は、とにかく筆が乗りまくっていて、書くのが楽しくて仕方がなかった。そして書いた第一稿がペラで122枚(！)というダブルスコアのオーバーぶり。65枚を基準に、と言われていたのに……。最初に提出した時は監督に『え？ 前後編？』と言われてしまった。一稿が2002.05.31、完成版の第八稿が2002.06.25なので、ひと月近くかかった事になる。もちろん他の仕事と平行して、だが。しかし八稿はひどい。メインのスタッフに、そのたびに読んでもらわなければならず、ずいぶん貴重な時間を使わしてしまった。最終的には、エンディングをカットする事で調整したが、エンディングに楽曲が流れなかったり、スタッフクレジットの扱いが小さくなったりと、多方面に迷惑をかける事になってしまった。反省。

○登場人物

ラッカ

ネム

レキ

ヒカリ

クウ

カナ

ヒヨコ（氷湖）・・・廃工場の灰羽。17歳くらい。男

ミドリ（緑）・・・廃工場の灰羽。16歳くらい。女

廃工場の灰羽、少年A 17歳くらい

廃工場の灰羽、少年B 15歳くらい

廃工場の灰羽、少年C 15歳くらい

スミカ・・・図書館司書25歳。女性

シヨータ・・・灰羽の男の子

ダイ・・・灰羽の男の子

ハナ・・・灰羽の女の子



●サブタイトル

●図書館、書庫（2階）

古びた本の並ぶ書架。書架自体も長い間人の手に触れられたのであろう、角が取れ、木目は深く柔らかな光沢を持っている。その書架に、とん、と指が置かれる。指は書架の端をとん……とん……とリスミカルに叩きながら、左から右に緩やかに滑ってゆく。

ネム「2273、74……76、77……」

ネム、並びの逆になっている本をすつと抜き、正しい場所に戻す。手慣れた、滑らかな動作。耳に挟んでいた鉛筆で、持っていたクリップボードに挟んだ書類にチエツクをいれる。左肩に腕章。図書館のロゴが入っている。遠くから、カツ、カツ、カツと元気のいい靴音。ネム、はつと顔を上げる。

ネム「スミカ？」

足音、びたりと止まる。スミカ、書架の向こうからちよつと驚いた顔でひよこつと顔を出し、歩いてくる。25歳くらい。こざつぱりと化粧をしている。おしゃれ。マタニティドレスを着ていて、お腹がやや目立ち始めている。

スミカ「……何で分かったの？」

ネム「靴」

スミカ「ああ」

ネム「ヒールやめなさい。コケるわよ」

スミカ「ちえ。ママと同じことを言う」

ネム「（苦笑して）で、いつまで働けるの？」

スミカ「一応、今月いっぱい」

ネム、ちよつと虚を突かれた風に

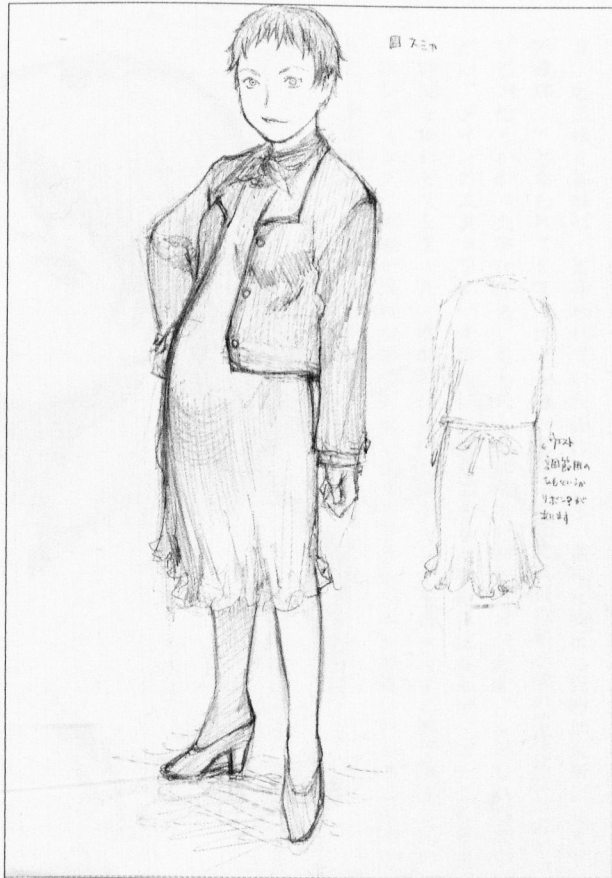
ネム「今月？……ってあと4日じゃない」

スミカ「ああ、書類上の話。動けるうちは手伝うわよ。力仕事はムリだけど」

リだけど」

ネム「無理しないで。それより準備とか、大丈夫なの？」

スミカ「いやーもう大変。仕事の引き継ぎやら書類の手続きやら。」



▲本が予測不能な増え方をする図書館で、本を整頓管理するのはものすごく大変そうだな。番号は実際は4折ではなく『Y134586』の様になっていて、ネムが読み上げているのは末尾の4折。まあどうでもいい事ですが。

■スミカ。お腹はやや目立つ程度、絵として分かったり、はつとに

「そうだ、館長来てる？」

ネム「下じゃない？」

スミカ「あーあ。そんな、面倒なのから先に片づけっかなー」

スミカ、両手を頭の後ろで組んで歩き出す。それをぼんやりと見送るネム。寂しそうな、同時にどこかほっとした顔。

●図書館、1階展示室

ラッカ「うんしょ、うんしょ」

開館前のため照明が消えていて、ちよつと薄暗い展示室。展示されているのは、使途不明の機械の一部や、機械の化石のようなもの。読めない文字で書かれた古書など。

ラッカ、そんな展示物の合間を縫うように、本の詰まったカーゴ（空港で荷物を運ぶようなもの）を押している。カーゴは木製で、車輪がきしんだ音を立てていて、いかにも重そう。ラッカも左腕に腕章。ネムとは色違い。

ラッカ、薄暗い展示室にちよつと怯えながら展示室から廊下に出る。

●図書館、1階、階段前

2階書庫へと続く階段の前。立ち往生してしまうラッカ。そこへ、2階からスミカが降りてくる。スミカ、ラッカの見習いの腕章を見て、ふ、と笑い、歩み寄る。

階段の手すりの下に、カーゴが通れるくらいの幅の板が立て掛けてある。板の下部は蝶番（ちよつつかい）で手すりの下に固定され、板の上部は、倒れないように紐で手すりに結ばれている。スミカ、紐をほどいて、板を倒し、カーゴが登れるようにする。ラッカ、スミカが何者か分からず、戸惑う。

スミカ「ネムの友達？」

ラッカ、ネムを知っているのだと分かり、ちよつとほつとする。



▲1階展示室の展示物に関して、わりと細かく設定があったのだけど、尺の関係で展示物を紹介する時間がほとんどなかった。残念。

■腕章。なんか説明の文字が疲れ切ってますね。

ラッカ「はい。ラッカって言います。新生子（しんせいし）なんで、見学させてもらってます」

スミカ「私はスミカ。ここの司書。よろしく………つていつても、（お腹を撫で）いつまで働けるか分かんないけど」

スミカ、カーゴの前の取っ手（前後に付いています）を握り、カーゴをひっぱる。

スミカ「手伝うよ」

ラッカ「そんな、大丈夫です」

スミカ「一人じゃムリムリ、ホラ」

ラッカ「す、すいません」

カーゴを押し上げる二人。押すラッカとひっぱるスミカ。スミカ「新生子（しんせいし）って事は、生まれたばかりなんでしょ？とても赤ちゃんには見えないけど」

スミカ、まじまじとラッカを見る。赤くなるラッカ。

スミカ「ね、生まれてくる時って、どんなだった？怖かった？」

ラッカ「………いいえ。よく憶えてないけど………夢の中で、誰かが守ってくれてた気がして………」

スミカ「ふうん………」

スミカ、考え込んでいた表情が、ゆっくり笑顔に変わる。

がたん、とカーゴが板から2階の床に乗る。ほっと息をつく二人。ラッカ、深々とお辞儀。

ラッカ「ありがとうございます」

スミカ「こっちこそ。いいこと聞いちゃった」

ラッカ「え？」

スミカ「親の気構えてやつをね」

スミカ、ひらひらと手を振りながら、階段を下りてゆく。ぽかんとした顔で見送るラッカ。

●図書館、書庫入り口（2階）

ネム「よくひとりで持って上がったね。呼んでくれれば手伝ったのに」

ネム、カーゴの取っ手をつかみ、書庫の方へ運ぶ。ラッカも手伝う。

▲このシーンの、階段の上に敷いて、カーゴを通すための板は、実際にあるのかどうか分らないけど、こういうものでもないかと本を運ぶのが大変だと思って考えた。でも、段取りが無意味に面倒なので、本編では始めから階段の脇に平坦な部分を設定されている。でも、階段ちょっときつすぎ。一人で持ち上げるのが大変、というのがはっきり伝わるようにだと思っただ。

▲このあたりも、短くするためにずいぶん試行錯誤した。

ラッカ「スミカさんて人が手伝ってくれたの。ここの司書だつて」

ネム「ああ。スミカは私の先輩。いや、元先輩か」

ラッカ「辞めちゃうの？」

ネム「……うん」

ネム、気を取り直すようにカーゴから両手で本の山を持ち上げ

ネム「その分も、頑張らなきゃ」

●図書館、事務室（2階）

目録の詰まった仕分け棚が壁を覆っている。ごちんまりとした部屋に机が4つ程。どの机も書類や本が積まれていて、雑然としている。

机のひとつにどざりと本を積むネム。ホコリがばらばらと落ちる。

ネム「ここの本はね、みんなトーガの交易品だから、どんな本がい

つ来るか分からないの。だから整理が大変。それに……」

ラッカ「じゃあ、これ、みんな外の世界で書かれた本なんだ……」

ラッカ、目を輝かせ、机に積み上げられた本の山から1冊手に取る。背表紙の上の部分がべろんとはがれてしま

う。

ラッカ「わっ」

慌てるラッカ。救いを求めるようにネムを見る。

ネム「それに、古い本ばかりだから気をつけて」

ラッカ、ぼろぼろの本を見て呆然。

●図書館、事務室。30分後

『要修繕』と書かれた段ボール箱をヒモで縛るネム。よ

いしょ、とそれを持ち上げ

るから、ラッカはラベル貼りお願い」

ラッカ「う、うん」

ネム、重そうに箱を抱えて出ていく。

▲ こういう異世界の物語をつくる時、言語はいつも問題になる。日本語でいいのか？とか、固有名詞をどうするかとか、故事やことわざのようなのをどうするか……。灰羽の世界は、完全な異世界ではなく、現実と何らかの繋がりを感じさせるつくりになっているので、日本語ができてきても構わないのだけど、見た目で異世界であるという感じがなくなるとか、結構気を遣う。

ラッカ「一人残され、慣れない手つきで本にラベルを貼つていく。」

ラッカ、きれいな挿し絵の本を見つけ、いつの間にか読み始めてしまう。

●図書館、カウンター前

無人のカウンター。スミカ、歩いてくる。カウンター奥にある事務室のドアを開け、首だけでひよいと中を覗く。スミカ「ネム……………あれ？」

部屋の中には、熱心に本を読んでいるラッカが一人。

●図書館、事務室

ラッカ「すいません。何度も手伝わってもらって……………」

スミカ「ううん。もともと私の仕事だもの……………それより熱心に何を読んでたの？」

ラッカ「何ってわけじゃないんですけど……………。この街の外に何かあるのか、どこかに書いてないかなって……………」

スミカ「ああ、分かる分かる。私も昔そういう本捜して回ったっけ」

ラッカ「へえ……………見つけましたか？」

スミカ「ううん。駄目だった」

ラッカ、意外、という表情。また作業をする手が止まってしまう。

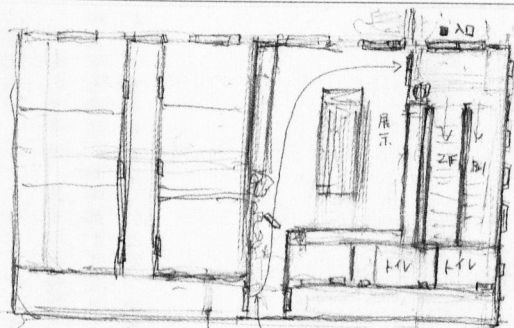
スミカ「木を隠すには森の中ってやつ。これだけ本があると、どれが空想の物語でどれが事実なのか、見分けようがないのよ」

ラッカ、なるほど、という顔。同時に少し落胆してラッカ「そっか……………そうかもしれないね」

ラッカ、目を伏せ、作業に戻る。スミカ、気落ちしたラッカをフォロウするように、努めて明るく話題を振る。

スミカ「私ね、昔、この街を出ようと思ってたんだ」

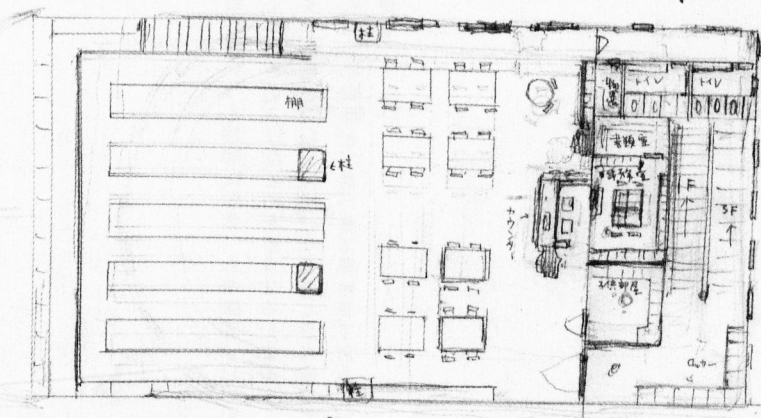
ラッカ、びっくりしてスミカを見る。



2002.06.29

図書館

1F



2F

■図書館内部見取り図。えらい苦労した。でもこれをしないと、外観と内部の整合性がとれなかったり、後で面倒な事になったりする。

スミカ「世界の始まりを知りたかったの」
ラッカ「せかいのはじまり？」

スミカ「たとえば、この街が今ここにあって事は、誰かが最初にこの街を造ったからだよ」
ラッカ、うなづく。

スミカ「それと同じように、世界がどれだけ広くたって、捜せば始まりがあると思うの。それを知りたくて……………」

スミカ、遠い目をする。ラッカ、いつの間にかスミカの話に釣り込まれている。

スミカ「でも駄目だった（ここから声のトーンが突然おちやらけた感じになる）。……………なにしろ、夢より現実の方が幸せなんだもん」

スミカ、お腹をぼん、と撫でる。ラッカ、スミカの真面目とおふざけのころころ入れ替わるしゃべりについていけず、苦笑い。

ラッカ「は……………」

スミカ、素の表情になり

スミカ「ま、夢は夢のままだから美しいって事。でも、ときどき

ふっと考えちゃうのよね。あーあ、人生って難しいわあ」

両手を頭の後ろで組んでのんきに笑うスミカ。突然、開館を告げるチャイムの音。

スミカ、ラッカ「いつけない！」

●図書館、カウンター（2階）

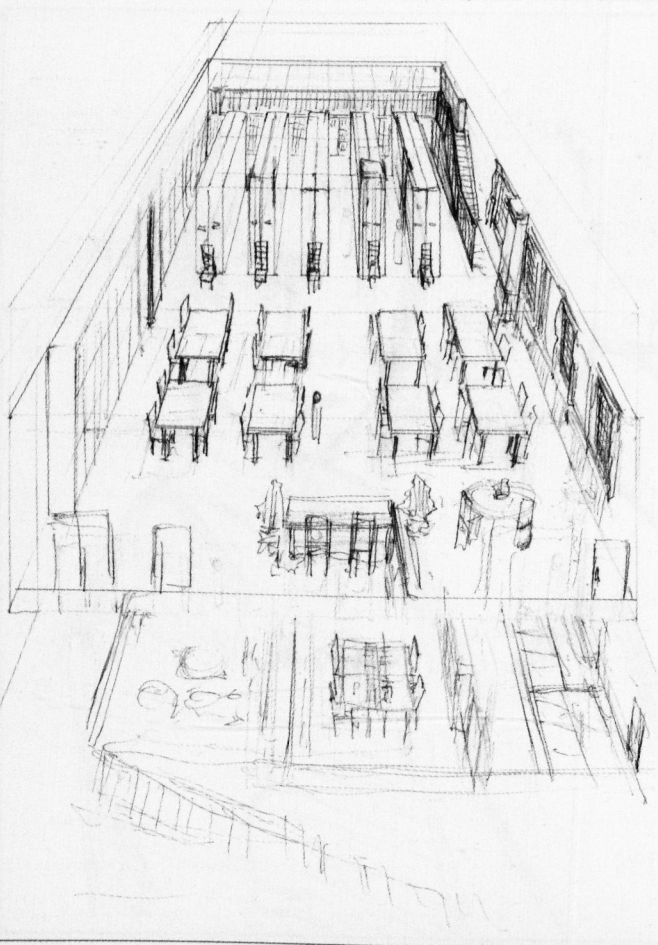
ネム「……………まったく、スミカにも困ったもんね」

図書館はすでに開館している。客はまばら。ネム、カウンターに座り、手際よく本の貸し出して続きをしている。表情を変えず、客の合間を縫って小声の会話。隣に座って、貸し出しカードにスタンプを押す係をしているラッカ。しよげている。

ラッカ「……………ごめんね」

ネム「ラッカはいいよ。初めてだし。スミカは先輩なんだから……………」

▲スミカのような考えを持って、街をてようとするとする人間は、ごく稀にいるようだ。一度街をてたら、もう戻ってくる事はできない。灰羽は街をてる事はできない。



スミカ「もっとまわりの規範にならないとお」

スミカ、ネムのセリフを横取りしながらやって来る。

ネム、スミカの方を見ずに貸し出し手続きをしながら、
小声で

ネム「分かってんなら実践して」

スミカ「はいはい。カウンター代わるわよ。お話お姉さんの出番だ
て」

ネム、やっと顔を上げる。

●図書室、書庫入り口

書庫入り口。レキ、クウ（帽子あり）、ヒカリが子供た
ちを引率して来ている。レキ、ラッカとネムに向かって、
かるく手を上げる。

ラッカ「みんな」

レキ「顔見がてらにちょっと課外授業をね」

クウ「やっほ」

レキ「クウ！チビ共のお手本になるんだろ？」

クウ「そうだった」

大げさに口を押さえるクウ。

ヒカリ「ラッカ、頑張ってる？」

ラッカ「……はは」

ラッカ、苦笑い。

ネム「さて、何の本を読んであげましょうかね」

腕まくりするネム。

●子供部屋

ネム、部屋の真ん中の低い椅子に座って、子供たちに本
を読んでいる。両脇と後ろから本をのぞき込む子供たち。
本の絵柄。鏡の後ろに隠れている若者と、そこに向かっ
て魔法を放っている魔法女の絵。

ネム「……こうして悪い魔法使いは、醜いカエルになってしま
いました」

7



ページをめくると、魔女はカエルになってしまっている。鏡の裏から飛び出す若者の絵。

ネム「若者はさらわれた子供たちを助けるために、高い高い塔の階段を登ってゆきました」

本を読むネム。かたずを呑んで聞き入っている子供たち。ラッカやクウやヒカリも、真剣に聞いている。

ネム「……若者が老婆にもらった種を撒くと、種からはあつと言う間に蔓が伸び、若者と子供たちはひゆるるるゝつとその蔓を伝って無事に地面に下り立つ事が出来ました。こうして村に平和が戻りましたとさ」

子供たち、わーっと拍手。ラッカ達も一緒に拍手。

ネム「やめてよ、照れるじゃない」

レキ「ホラ、お話お姉さんにありがとうは？」

子供たち「ありがとー」

シヨータ「カエルにしちゃうぞ。びびび」

ダイ「やくめくろくよ」

レキ「コラ！悪もんのマネしてどうする！」

ネム「こんなもんでよかったかしら？」

レキ「もちろん。こいつらがこんな長い事おとなしくしてたの初めてだ。これからちよくちよく来ようかな」

ネム「次からはあんたがやんなさいよ」

レキ「えー」

●図書館、階段前

帰り際。レキ達を見送るネムとラッカ。

レキ「でも、随分感じ変わったなあ、ここ。前は学者しか来ないよ

うな感じだったのに」

ネム「でしょ。苦労してるのよ。いろいろね」

クウ「びびび」

ハナ「えい」

ハナ、手鏡をクウに向ける。

クウ「わくやられた」

ヒカリ「クウってば……」

▲本の朗読がコンバクトになったために、削られた部分を受けた、子供達とクウの馬鹿っぽい会話が無くなってしまっただけで残念。ついでにヒカリの『クウってば……』も。

レキ「あ、そうだ。私、買い物あるんだ。ヒカリ、チビ共連れて帰れる？」

ヒカリ「うん、いいよ。クウもいるし。クウ、先生の代わりだって」
クウ「せんせい?!やる!」

レキ「助かる。じゃ」

レキ、ネムとラッカに手を振り、歩き出す。後に続く、子供たち、ヒカリ、クウ。

ネム、皆が階下に消えると、うん、と伸びをして

ネム「あー肩凝った。レキもよく毎日子供の相手する気になるわよね」

ネム、ラッカ、カウンタに戻るために歩き出す。

ラッカ「ネムだって、子供好きそうに見えたけど」

ネム「たまにだからよ。毎日絶対無理」

●図書館1階展示室、夕方。

陽が傾きかけている。閉館を告げるチャイム（少し長めの音楽のようなもの）が物憂げに流れている。

朝、ラッカがカーゴを引いて通った展示室。今もまたラッカ一人が、ぼつねんと所在なげに立っている。傍に『閉館しました』の札。窓から夕日が差し込んでくる。

良く分からない展示品の中に、古い本……正確には本の化石のような物が展示されている。石版に、本の形の窪みがあり、本の表題らしきレリーフがうっすらと見える。だが、それは文字ではなく、よく分からない形。よく見ようと、手すりを握り、身を乗り出したところで、奥のドアを開けて、ネムがかけてくる。

ネム「ごめん、明日の打ち合わせがちょっと長引いて」

ラッカ「ううん。それよりごめんね、あんまり役に立たなくて」

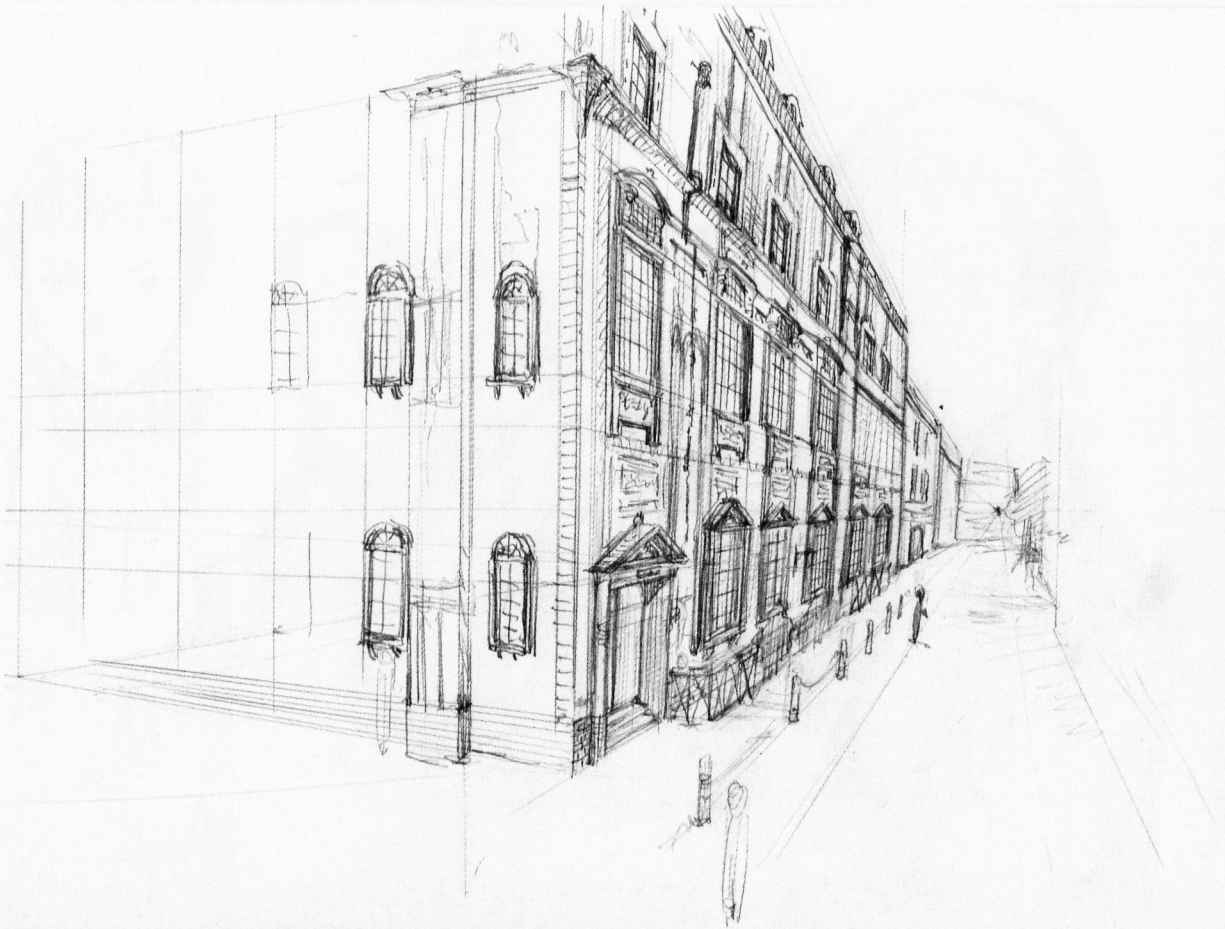
ネム「十分よ。……ああ、でも、あと4日かあ」

ラッカ「え？」

ネム「スミカ的事。お祝い、考えてたんだけど、間に合うかな」

ラッカ「なあに？編み物？」

ネム「ナイショ」



ネム、入り口の扉を開け、二人は外に出る。

●街、図書館前

中と同様、古びた外観の図書館。ネムとラッカの会話は
続いている。

ラッカ「……教えてくれたら手伝うのに」

ネム「なんか、照れくさくて。……うーんと、ヒントはね、世界

の始まり」

ラッカ「え……?」

ネム「昔、あの図書館に、そういう本があったの。もう棄てられちゃっ

たけど、古くて、最初の何ページかしか判別できないような

ぼろぼろの本。スミカと二人で続きをあれこれ考えてね……

……

ラッカ「それから?」

ネム「ヒントはそれだけ」

ラッカ「えー」

夕暮れの街。メインストリートからちよつとはずれた辺
り。遠くに、トートバッグに荷物をいっぱい詰めて歩い
ているレキの後ろ姿。

ラッカ「あ、レキだ。レキ!……あれ」

レキはラッカに気づかず角を曲がってしまう。

●街、東地区

十字路。ラッカ達がひよこつと顔を出す。

ラッカ「あれえ?もういない」

ラッカ、遠くにレキを見つけて

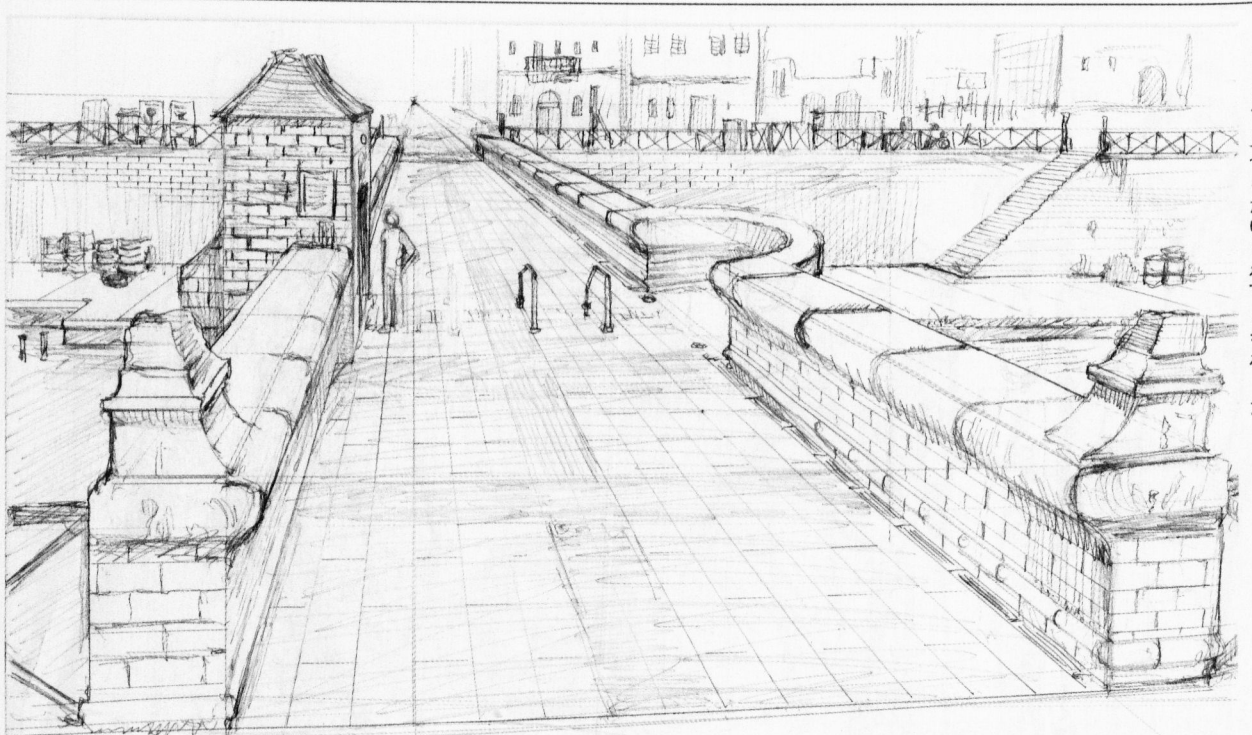
ラッカ「あれ、道、逆だよね?」

ラッカ、ネムを振り向く。真顔になっているネム。すた

すたと歩き出す。慌ててあとを追うラッカ。

●工場橋前

▲本当は、ここで本の化石について多少話を振っておくつもりだったが、尺が足りず、か
ろうじて見せるだけしかできなかった。



■廃工場地区へと続く橋。何だかパースを取るのにえらい苦勞して、何枚も描き直した記憶がある。橋の中央の膨らみは、通行者が橋の中央で鉢合わせた時、片方が膨らみに寄ってスムーズにすれちがえるようにするためのもの。もう少し幅の狭い橋のためのものなのかもしれないが、デザイン的に面白いので残した。実際、わりと幅の広い橋でもこういう形のものがあるので、デザイン的な意味もあるのかもしれない。

廃工場地区と市街地を隔てる河にかかる大きな橋の近く。人通りはない。橋の反対側の通りの街灯の陰に隠れ、端の方を伺うネムとラツカ。

橋の中ほどには、車両の交通を制限するような踏み切りがある。日に焼けた元氣そうな老人が、レキにスクーターを渡しているところ。会話は聞こえない。レキ、老人に軽く頭を下げる。老人、破顔してレキの腕を軽く二、三度叩き、工場地区側に歩み去る。

ネムとラツカ、その様子を、少し離れた街灯の陰から見ている。

ネム「ああ、スクーターのガソリンか」

ネム、ほっと息をつき、安心した様子。それを怪訝そうに見るラツカ。

レキ、荷物をスクーターの荷台に固定し、煙草をつけ、スクーターにまたがり、走り出そうとする。不意に、橋の向こうから、ドロドロとバイクのエンジン音と派手なクラクションの音。口笛。

レキ、はっと橋の向こうを振り返る。橋の向こうからヘッドライトをもるに当てられ、目を細める。数人の灰羽の少年たちがオンポロのハーレーに乗って、走ってきたところ。橋の近くでバイクを止め、口々にはやし立てる。

廃工場の少年A「ほーらみる、やっぱレキじゃん」

レキ、顔が険しくなる。

廃工場の少年B「レキ？誰よ？」

廃工場の少年C「ホラ、前に言ったろ、ヒヨコのアレ」

廃工場の少年B「あーあーあー」

廃工場の少年A「おーい。ヒヨコに会いにこねえの？来れねえか、

往來禁止だもんなあー」

少年たち、バイクを降り、橋げたや、踏み切り部分など、

思い思いの場所に座り、橋のこちら側にいるレキと対峙する。バイクの後部席に乗っていた少女が、周囲より一歩レキに近づいて、腰に手を当て、レキを睨む。

ミドリ「なによ煙草なんてふかして。わざわざ会いに来たって、氷

湖はもうアンタとは会わないわよ（ミドリのみ、ヒヨコを

THE ガス屋

指はびくびく
目が一瞬
目尻のシワを
なめよう
特徴に



▲このシーンも、尺が足りなくてちょっと慌ただしくなっちゃった。ミドリが一度もアップにならなかったのが残念。僕がシナリオの段階でもう少しうまく調整できればよかった。

■ほんの数秒しか出番がないガス屋さん。

『ひょうこ』と発音します」

少年たち、どつと沸く。

廃工場の少年A「あーあーミドリが怒っちまった」

ヒヨコ「なに騒いでんだよ」

わいていた声が一瞬静まる。バイクが走ってきた道の反対側から、スケートボードに乗った少年が現れる。

少年は目深に帽子をかぶり、リュックを背負っていて、羽も光輪もない（見えない）

廃工場の少年A「噂をすればヒヨコじゃん。へへ」

廃工場の少年A、ヒヨコに目配せし、レキの方を向いてガムをふーっと膨らまし、ぱちんと割る。

ヒヨコ、少年Aが指した方を振り向く。レキと目が合う。

ヒヨコ「レキ」

ミドリ、ヒヨコの腕をつかんで

ミドリ「相手する事ないわよ」

ヒヨコ、ボードから降り、ミドリを一瞥もせず無視して、毅然とした態度でレキの方につかつかと歩いてゆく。

背後で少年たちがヒューヒューとはやし立てる。

橋の市街地側、レキのスクーターの前でびたりと足を止めるヒヨコ。レキが何か言うより速く、横面を張るような動作で、レキのくわえていた煙草を奪い取る。

レキ「なにすんだよ！」

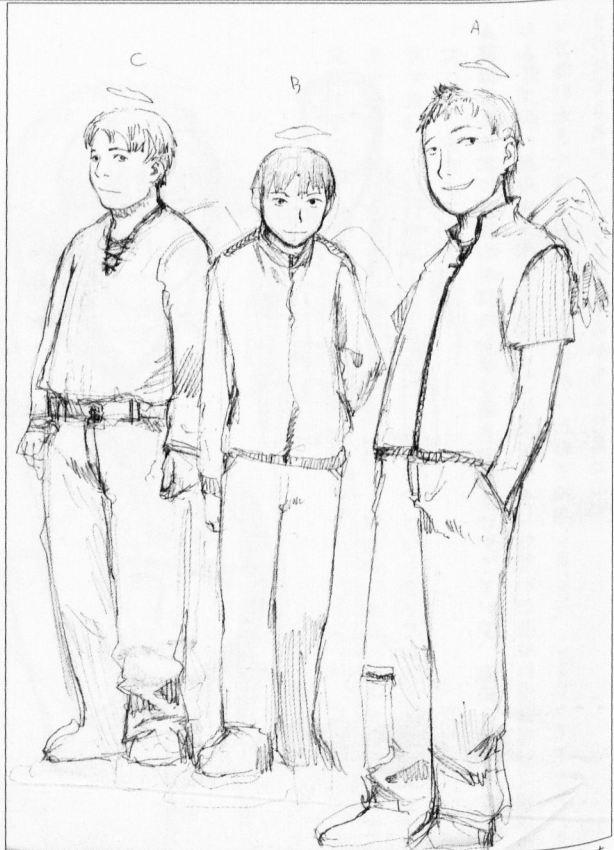
ヒヨコ「こんなもん吸うな！馬鹿。バイクもやめろ！」

レキ「バカはテメエだ！こいつは街の許可とって、天下御免で乗ってたんだ」

レキ、お返しとばかりに、ヒヨコの帽子の糸（小学生の体育帽のように、両耳の辺りに糸をつけて、アゴの下で結んでいる）をぶちっとむしり取る。帽子はびっくり箱のようにびよこんと飛び上がる。跳ね飛んだ帽子の下から光輪が見える。

ヒヨコ「あっわっわっ」

と、帽子を慌てて押さえるヒヨコ。驚いた拍子に、背中のリュックから、羽の先がばさつと顔を出す。



■廃工場の少年たち、1案。次のページの方が決定稿に近い。あま、ほとんど出番がないわけですが。Aのうらなり君がバカっぽく気に入っていたのだが、わりと普通の顔になってしまっていた。多分、漫画っばすぎて浮きかねなかったのだと思う。

レキ「ばあーか」

レキはバイクをスタートさせて、走り去ってしまう。
 廃工場の少年A「ザンネーン。ヒヨコ、おめえの負けだよ」

と、やじられるヒヨコ。周囲からもからかいや口笛が飛ぶ。一連の光景を呆気にとられて見ているラッカ。ネムに袖を引かれる。

ネム「ホレ、他人のフリ他人のフリ。巻き込まれないうちに行くわよ」

●帰り道。街はずれ

帰り道、レキの話をするラッカとネム。

ネム「灰羽の噂は、人が捨ててしまった古い建物に生まれるの。それは知ってるよね。東の廃工場も灰羽の巣でね、あつちはな

ラッカ「へー……。さっきの帽子の人も、廃工場の灰羽なの？」

ネム「そ。昔、いろいろあったのよ、あの二人」

ラッカ「い、いろいろって？」

ネム「あの頃はまだ、オールドホームに私とレキと子供たちしかいなくて、レキは、なんていうか、荒れててね」

ラッカ「うわーうわー」

ネム「……っていつても、狭い街だしねえ。結局、逃げてるうちに男の子が病気で倒れて、レキが医者呼んでバレておじゃん」

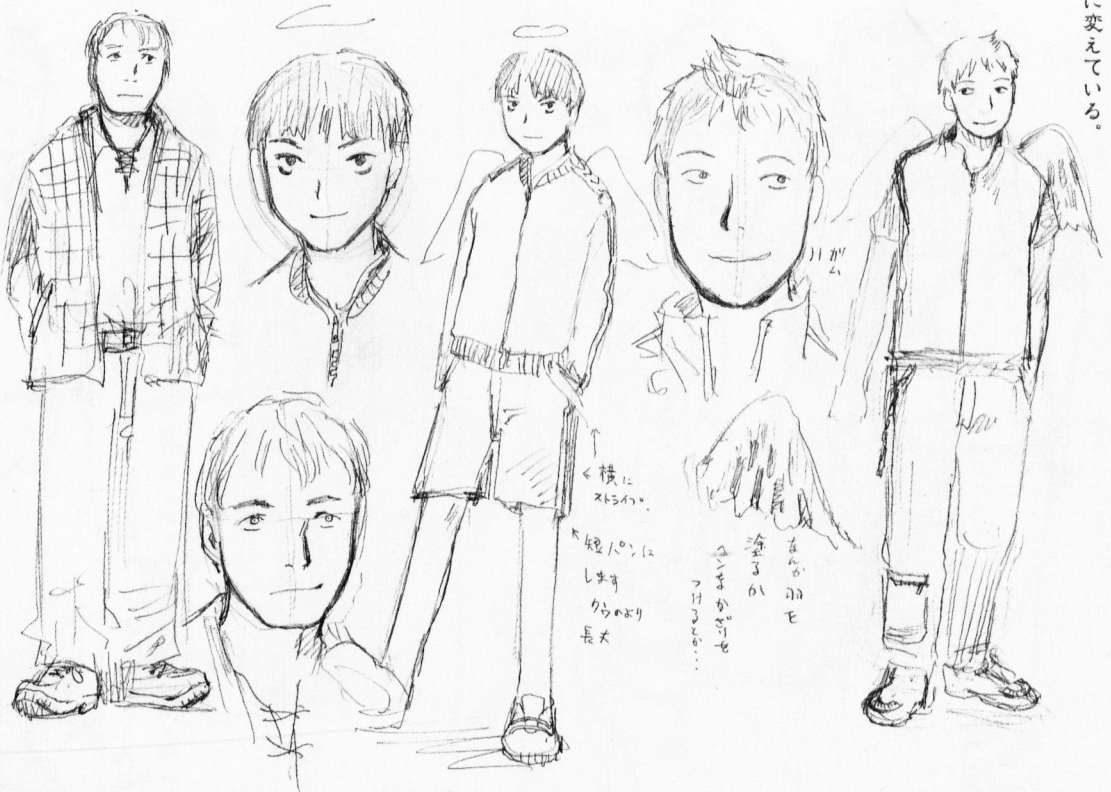
ラッカ「……すっ……い。駆け落ち。かっ……いい」

ネム「真似しちゃダメよ。そのせいであの二人、お互いの住んでる地区に入れなくなっちゃったんだから」

ネム「あーあ、共学もいいかなと思ったけど、廃工場の男の子達は悪そうに」

ラッカ「うん……」

▲廃工場の連中、特にヒヨコに対してのレキの言葉遣いは、他の人に対する場合と意図的に変えている。



▲僕の中で大変に衝撃的だった『駆け落ちかっ……いい』。いや、このセリフを書いたのは僕なんです。頭の中で考えていたイントネーションと何かが微妙に違っていて、僕の中のラッカ像が大きく揺らいだ。でも面白かったの採用しました。こうやってキャラクターといふのはできあがっていくものなのかもしれません。

嫌い。ガサツで」

●ゲストルーム、ベランダ。夜

薄暗い部屋。ベランダに続くドアは少し開いていて、カーテンがかすかに揺れている。

ベランダ。ラッカ、ぼんやりと歩いている。何気なく手すりに手を置き、外を見る。オールドホームの時計台に、明かりが見える。多分カナだろう、と、ラッカは少し微笑む。空には少し朧（おぼろ）がかかった、大きな月（月の状態は1話の状態から計算）。

ラッカ（モノローグ）『私の記憶の中には、もう一人の私がいる。ネム達は違うといったけど、どこかに両親や住んでいた町があるんじゃないかと、今も心のどこかで思っている……。羽が体に馴染んだら、この違和感も消えるのだろうか……。……』
両手を手すりに置き、その上に頬をうずめるラッカ。ゆっくりに羽をゆする。

ラッカ（モノローグ）『……ここではみんな、小さなクウでさえ仕事を持ち、自分の力で生きている。でも本当は、見えない所で、みんな支えあっているのだ。当たり前的事だけど、私はここに来て、初めてそれを知った気がする。記憶の中の私は、もしかしたら、自分しか見えていない、心の狭い人間だったのかもしれない』

ラッカ（声に出して）「いいのかな、私……こんなに幸せで……」

●図書館、書庫

朝の書架整理をしているネム。おお欠伸（あくび）。
ラッカ「おはよう」

ネム、びっくりする。

ネム「ラッカ、どうやって入ったの？」

ラッカ「守衛さんに聞いたら入っていいって。ネムこそどうしたの？」

今朝起きたら、もういないから」

▲個人的に思い入れのあったシーン。でも、モノローグは長すぎて前部は入らなかった。冒頭の部分も、思わず小説のような情景描写をしてしまって、画にしづらい。『……と微笑む』って言われても……。

ラッカの『いいのかな……こんなに幸せで』というセリフは、この話数単体で見ると、多少唐突に感じるかもしれない。でも、通して見た時、あるいは一度観終わってもう一度見返す時には、うまきはまってくれると思う。



■ヒョコの表情集。前の項に入り切らなかった。ミドリは次の登場シーンにいます。

ネム「ああ、今日から交代で朝夕1時間ずつ、全館の蔵書チェックをする事になったの」

ラツカ「手伝っていい？」

ネム「ん。そりゃいいけどさ。次、夕方だよ」

ラツカ「じゃ、それまで調べ物してるよ」

ネム「調べ物って……何を？」

ラツカ「世界の始まり」

いたずらっぽく笑い、たたた、と書架の間の通路をかけてゆくラツカ。あきれた、という感じで微笑むネム。

●閲覧室、午後

書庫の手前の机の一角。本の山を築いているラツカ。百科事典のような大きな厚手の本と格闘中。

スミカ、書類の束を持って入ってくる。ヒールはやめ、

スニーカーを履いている。ゴムのキュツ、キュツという

足音。本の虫になっているラツカを見つけ、カウンター

のネムの方をちよんちよんとつつき

スミカ「あの子、どうしちゃったの？」

ネム、笑って

ネム「内緒。そっとしてあげて」

スミカ「ふーん……」

スミカ、ふと笑って

スミカ「そっぴや。ネムがここで働き始めた頃って、あんな感じだったっけ」

ネム「(そっぴやなく) そうだったかしら」

スミカ、肩をすくめて事務室へ。ネム、スミカがドアの

向こうに消えたのを確認してから、微笑む。遠い目。

●ネムの夢。世界の始まり

○汚れ、酸化して穴だらけの古びた紙。世界の始まり、という古めかしい文字と、ペン画のハッチングによる闇

20歳のスミカの声『世界の始まりに於いて、其処にはただ、無と

▲元々は、地下に開架書庫があって、その点検をするストーリーだった。そこで本の化石と不思議な文字の事や、世界の始まりという本の話が出て、ネムとスミカの昔の話なども出てくる予定だったが、何しろ長すぎた。開架書庫へ続く階段や大きな扉、薄暗い書架のイメージはわりとはっきりと頭にあって、出せなかったのが残念。

▲細かい事だけど、こんなエピソードもありました。気づいたでしょうか。

言う名の昏（くらい）い霧が在った』

14歳のネムの声（少したどたどしく）『神が顕れた。神はただ其処に在るだけで無に光を……えーと、齋（もたら）した』

20歳のスミカの声『神がその頭上に輝く……あー……』

其れは……太陽となった』

14歳のネムの声『駄目だよ、これ、穴だらけだもの』

20歳のスミカの声『しゃーない、あとは私らで考えるかあ』

●事務室、夕方

窓から夕日が見え、時間の経過が伺える。ネム、自分の席で、居眠りしている。ラッカ、入ってくる。ネムを見て、肩を揺すって起こそうと歩み寄るが、ふと、肩に触れかけた手を止めて、優しい目でネムの寝顔を見守る。不意に終業のチャイム。ネム、はっと目を覚ます。辺りをきよるきよる見て、すぐにラッカと目が合う。

ネム「やだ、見てないで起こしてよ」

ラッカ「……なんか、あんまり幸せそうに眠ってたから」

ネム、ばつが悪そうに、机の台帳をとんとんと叩いて揃え

ネム「……調べものはどうだった？」

ラッカ「うん。世界のはじまりって、不思議。いろんな場所にいるんな物語があつて、でもみんな少しずつ似てるんだね」

ネム「で、答えは？」

ラッカ、にっこり笑って

ラッカ「ネム、ヒントが答えなんて反則だよ」

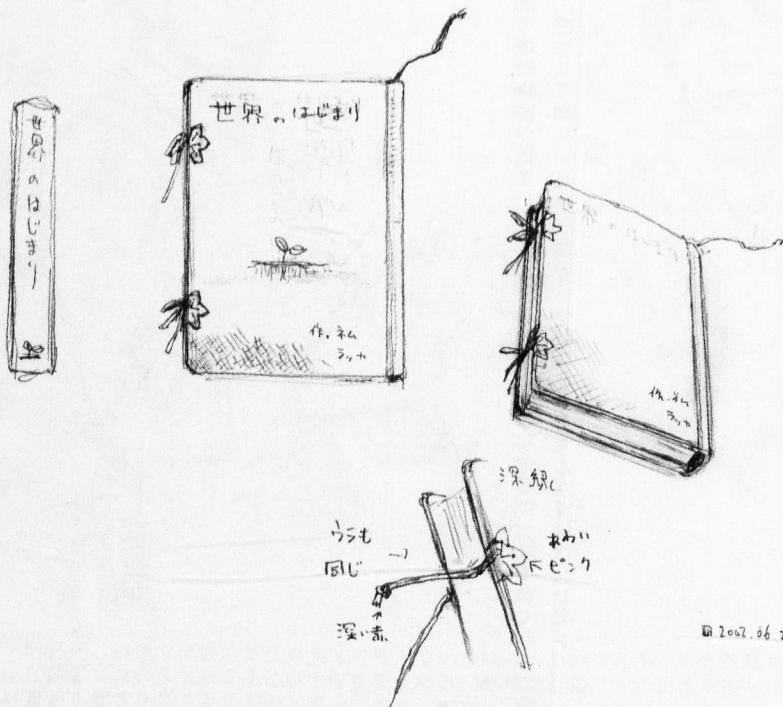
ネム、笑って

ネム「しょうがない……見ても笑わないですよ」

ネム、机の引き出しから、一冊の本を取り出す。書庫の本とは明らかに違う、布張りの真新しい装丁。文庫本くらいの大きさに、紐で留められるようになってる。金の糸で『世界のはじまり 作・ネム』と刺繍されている。

ラッカ「わあ！すごい。これ、どうしたの？」

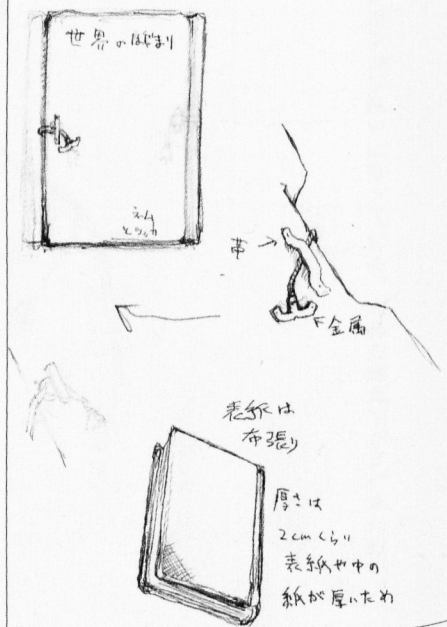
改められたネムの本



2007.06.23

スミカの大いなる文庫

ネムの本 マグニチュードが大きい



■世界の始まり、ネム作。右が最初の案で、左が決定稿。あまり変わっていませんが、金属の留め具が女の子らしくないかと思い、紐で結ぶ形にしました。

ネム「本の修繕してる職人さんに頼んだの。大変だったんだから」
 ラッカ「読んでいい？」
 ネム「わ、笑わない？」
 ラッカ「もちろん」

ラッカ、本を読み始める。ネム、ラッカがとなりで楽しそうに「ふーん」「へー」などと言うたびに、ちらちらとラッカを横目で見たり、手をもじもじしたり、赤くなったりと落ち着かない。

ラッカ「あれ、ここまで？」

ネム「う、うん、最後がなかなか決まらなくて。何かない？アイデア」

ラッカ、ちよつと考え、ネムをちらつと見て、

ラッカ「……………笑わない？」

ネム「もっちゃん」

ラッカ、ネムに耳打ち。

ラッカ「ここによごによごによ」

ネム「うんうん……………」

ラッカ「……………でね、ここによごによごよよ」

ネム、盛大に吹き出す。

ラッカ「あーっ！笑った。ひどい！」

ネム、お腹を押さえて苦しそうに

ネム「ま、真面目に考えてよ！」

ラッカ「真面目だってば。さつき、ネムの寝顔見てて、ちようどそんなこと考えてたの」

ネム「し、失礼ね！だめよ！これはえらい人のお話なんだから」

ラッカ「それはネムの本だから、読んだ時ネムの顔が浮かぶのがい

いと思うけどな」

ネム「私そんな行儀悪くないでしょ！ひどいわねえ」

ネム、本をしまつて立ち上がる。

ネム「もつと品のあるアイデアを募集します。さ、残業残業」

つかつかと出ていくネム。笑って後に続くラッカ。

●中央広場、夕方

▲ラッカの視点で進む物語なので、ラッカが思いついた事を観る側に秘密にしながら物語を進めるのは、時として難しい場合がある。今回はわりとすんなりいけたと思う。

▲笑ってるけど、よく考えると本当に失礼な言もする（汗）。

夕方遅く。夕方と夜の間くらい。時計台前の中央広場。
カナのポンコツ自転車がラッカを後ろに乗せ、広場を出
て通りを登ってゆくところ。ついてない、という感じで
無然とするカナと、上機嫌のラッカ。

ラッカ「よかったあ。残業で、もうくたくた」
カナ「ネムは？」

ラッカ「残業の残業」
カナ「あん？」

ラッカ「本の修繕技師の人に話があるんだって」
カナ「はーん。きつとまた居眠りしてさあ、すげー大事な本に、
ヨダレの染みでもつけたんじゃないの」

ラッカ、笑う。

ラッカ「はは、そうだったらネムらしいね。でもさ、一緒に働いて
て思ったけど、ネムってほんとはすごいしっかりしてるよ」
カナ「そりゃそーだ。普段やることやってるから、居眠りしても誰
も怒んないのさ」

ラッカ「……なるほど」
カナ「あきれれるけどね」

二人、笑う。前方にカフェが見える。

ラッカ「あれ、クウじゃない？」

カナ「あ、ほんとだ。まーた角砂糖せびつてやがんな」

●カフェ

カウンターでパイプを吹かし、皿を拭いているマスター。
何かを手をたたき、と入り口に走るクウ（帽子あります）。
振り返って

クウ「ありがとー」
マスター「おう」

クウ、走り去ろうとして、ふと思いついたように足を止
め

クウ「そうだ。さよーなら」

クウ、ぴたっと気をつけの姿勢。そしてふかぶかとお辞
儀。マスター、拭いていた皿を軽く振って見せ

▲いつのまにかポンコツ扱いになっている。4話の爆走でガタが来たのか。



■マスター。作中では店の事をカフェと呼んでいたけど、このマスターの雰囲気だと、夜はアルコールも出す店という印象を受ける。無精髭を描こうかどうか迷った形跡がある。古着屋とかぶるかと思ってやめた。

マスター「ああ、坊主も気づけてな」

●路地

狭い路地。ごみ箱の脇に、野良猫がいる。

クウ「おいで」

クウ、手にしていた角砂糖を差し出す。野良猫、クウの手のひらの角砂糖をひと舐めして、口にくわえ、走り去る。数歩走ったところで、クウを振り返る。

クウ、片手を上げて

クウ「バイバイ」

走り去る野良猫。クウの背後にラッカ。

ラッカ「クウ！」

クウ「あ、ラッカだ」

ラッカ「何してたの？」

クウ「ん………挨拶」

ラッカ「挨拶？」

路地をのぞき込むラッカ。無人。首をかしげるラッカ。背後ではクウがカナの自転車の荷台によじ登ろうとして、カナと小競り合いをしている。

●ゲストルーム、翌日、早朝

ラッカ、着替えて、出発の準備をしているところ。ノックをして、レキが入ってくる。

レキ「おはよー。あれ、ネムは？」

ラッカ「まだ寝てる」

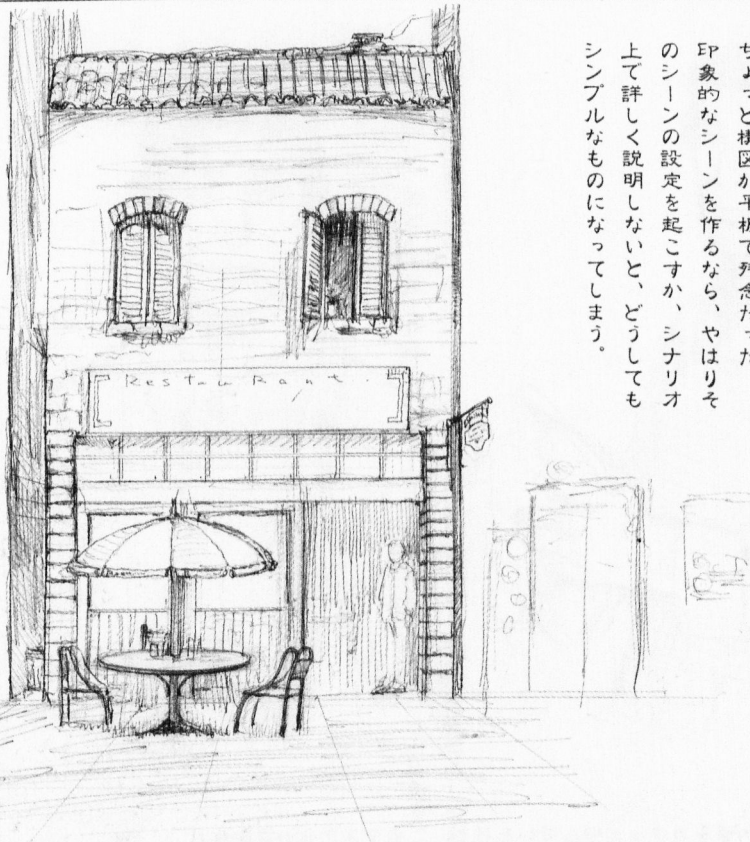
レキ「ああ？なんだ、珍しく早起きして頑張ってると思ったら、文字通りの三日坊主か」

ラッカ「ううん。昨日夜中まで図書館に残ってたから」

レキ「なに？仕事？」

ラッカ「ううん。個人的な事だけど、すごく大事な事………かな」

レキ「はあ………？なんかしらんけど、そりゃぎりぎりまで寝てるな、きつと」



▲マスターは、もしかしたら最後までクウを男の子だと思っていたかもしれない。クウのこうしたやりとりは、できるだけ丁寧に書いて伏線として生かしたかった。店内の情景を、もう少し詳しく描くか、設定を起こせば良かったかもしれない。

▲このあたりも、好きなシーン。でもちょっと構図が平板で残念だった。印象的なシーンを作るなら、やはりそのシーンの設定を起こすか、シナリオ上で詳しく説明しないと、どうしてもシンブルなものになってしまう。

■カフェ。確か、かなり早い時期に設定を起こした記憶がある。2話で登場する予定だったからだろうか。店の名前がKartieなのはご愛嬌。監督案だったか。店の色のイメージはあまりなかったが、美術監督がちょっと変わった感じがいいといってくすんだピンクの壁にした。適度に特徴がでて良かった。

●台所

いつもの事、という感じでした。たと台所に行くレキ。

髪を後ろで結び、慣れた手つきで握り飯を作っているレキ。見様見まねのラッカ。

ラッカ、ちらっとレキの方を見る。廃工場の出来事を思い出す。

レキ「ラッカ」

ラッカ、突然呼ばれてびくつとする。ラッカの握り飯は形がいびつになっている。

レキ「三角、三角」

ラッカ「あ……………」

慌てて握り直すラッカ。のれんの向こうで、ドアの開く音。続いてばたばたと足音。

ネム「うわー大変、ラッカ、私「飯いいから……………」あれ？」

レキ、バスケットに握り飯を詰め終わり、フタをしたところ。

レキ「ドンピシャ」

ラッカとレキ、顔を見合わせ、笑う。

●町へ続く道、早朝

まだ朝靄のかすかに残る畦道。ラッカが自転車を漕ぎ、ネムは後ろの荷台でラッカにもたれてうとうととしている。自転車の籠にはバスケットと、リポンのかけられた小箱。

ラッカ、嬉しそうに。

ラッカ「スミカさん、喜んでくれるといいね」

ネム「……………んん。ムニヤ。あきらめられたら……………ラッカのせいだからね」

ラッカ「え、なんで？」

ネム「そりゃ、あなたとの合作だもの。表紙にもラッカの名前入ってるからね」

ラッカ「……………ええーっ！」

▲最近、握り飯やサンドウィッチをよく作ります。「さんかく、さんかく」は確か祖母が言っていた言葉、と記憶しているが、祖母のおにぎりは丸かった気がする。幼稚園くらいの時に、母が作った弁当にばっちり三角のおにぎりが入っていて大変感心していたら、プラスチックの三角の型にごはんを詰めて作っていて「騙された！」と思った記憶もある。

▲ホンコツじゃない方の自転車。ちゃんとカゴがある。

ネム「今さら何よお」
 ラッカ「そうじゃなくて……………いいの？」

ネム「連帯責任よ、覚悟しなさい」

ラッカ「ネム……………私、すごく嬉しい」

ネム「……………スミカもそうだといいけど」

ラッカ「そうに決まってるよお」

ネム、安心したようにほほ笑み、ラッカにもたれて寝てしまふ。

画面、ゆつくりとホワイトアウト。

●世界の始まり

霧の中のような世界。以下の○は画面に入る絵本の挿し絵。各モノログはクロスフェードする（時間を詰めるため）

○古い『世界の始まり』の本の、穴の開いたページ。

20歳のスミカの声『神がその頭上に輝く……………あ……………』

その声にかぶせるように

19歳のネムの声『神がその頭上に輝く光輪を手に取り、高く掲げると、それは太陽になりました』

○杖の絵。杖の先から線が生まれている。

19歳のネムの声『神が杖を一振りすると、無は二つに裂け、ひとつは空に、ひとつは大地になりました。ところが、手元が狂って線がゆがみ、山と谷とが生まれました。神は「失敗したが、それもまたよし」と言われ、それを残す事にしました』

○杖で地面に絵を描く神。描いた絵は地面からぴよこりと起き上がっている

19歳のネムの声『神が大地に描いた絵は、次々と大地の上に取り上がりました。大地には草が生え、鳥や動物が生まれました』

○人と灰羽の絵を空想し、悩む神

19歳のネムの声『最後に神は、自分の姿に似せた生き物を思い描



■世界の始まり、僕のメモ。正式なバージョンは助監督の知り合いの方をお願いして描いてもらい、監督が加工して、最後に僕が手を加えた。

かれました。最初につくった生き物は神とそっくりで、これは失敗でした。そこで神は、羽を灰色に塗り、光輪に穴を開けて、それを灰羽と名付けました。これもまたいまひとつの出来でした。神は改めて、羽も光輪も無い人間をつくられました。これは良い出来でした。神はすっかり満足して、そのまま……………」

○だらしなく居眠りする神

ここから『はラツカの声です。』

ラツカの声『……………疲れて居眠りをしてしまいました』

○鼻提灯を出して居眠りしている神。シャボン玉のように鼻提灯が

ふわふわと飛んでゆく。その中に灰羽の姿。

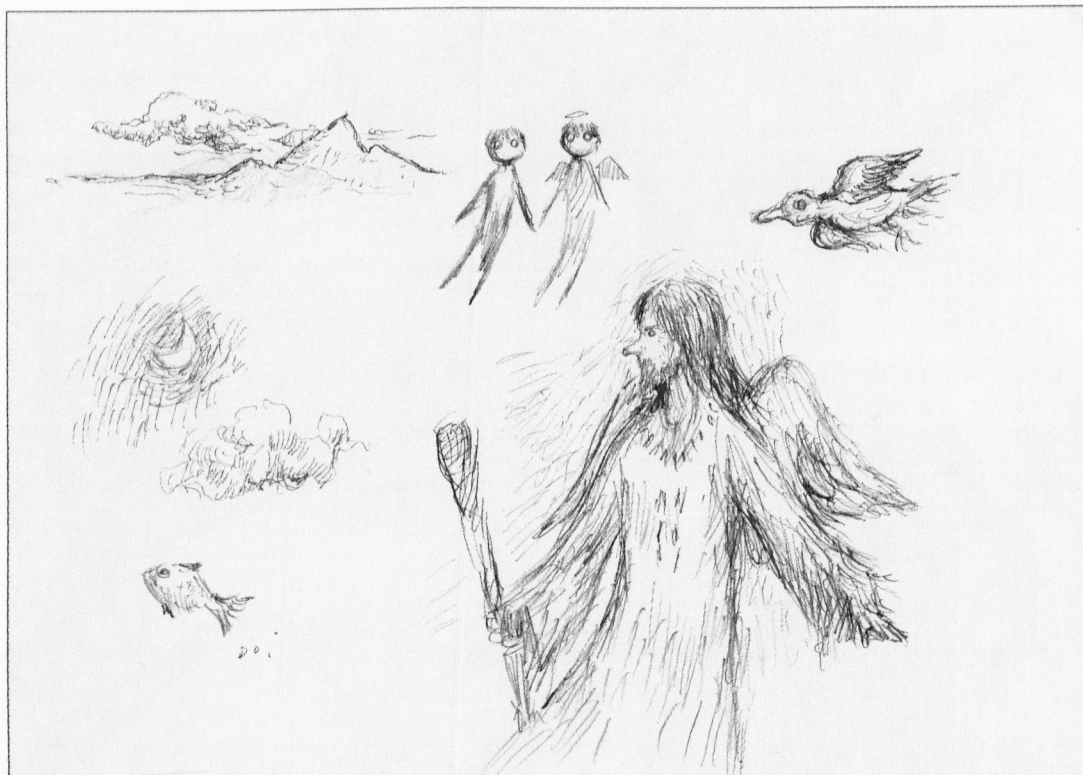
ラツカの声『消えてしまはずだった灰羽は、こうして神の頭（こうべ）の中から抜け出すことが出来ました』

○目を覚ました神

ラツカの声『神が目を覚ますと、すでに灰羽は空に浮かんでいます。た。神は鼻をこすって「これまた失敗した」と叫びました。

でも神は失敗に寛大でしたので、そのちっぽけな世界と灰羽達を残す事にしました。その場所はグリと名付けられ、人も住むようになり、やがて街が生まれました。……………こうしてグリの街は、大地でも海でも空でもない場所に、今もぽっかりと浮かんでいるのです』

原稿用紙200字詰め8枚（表紙含まず）エンディング部分カットすると88枚



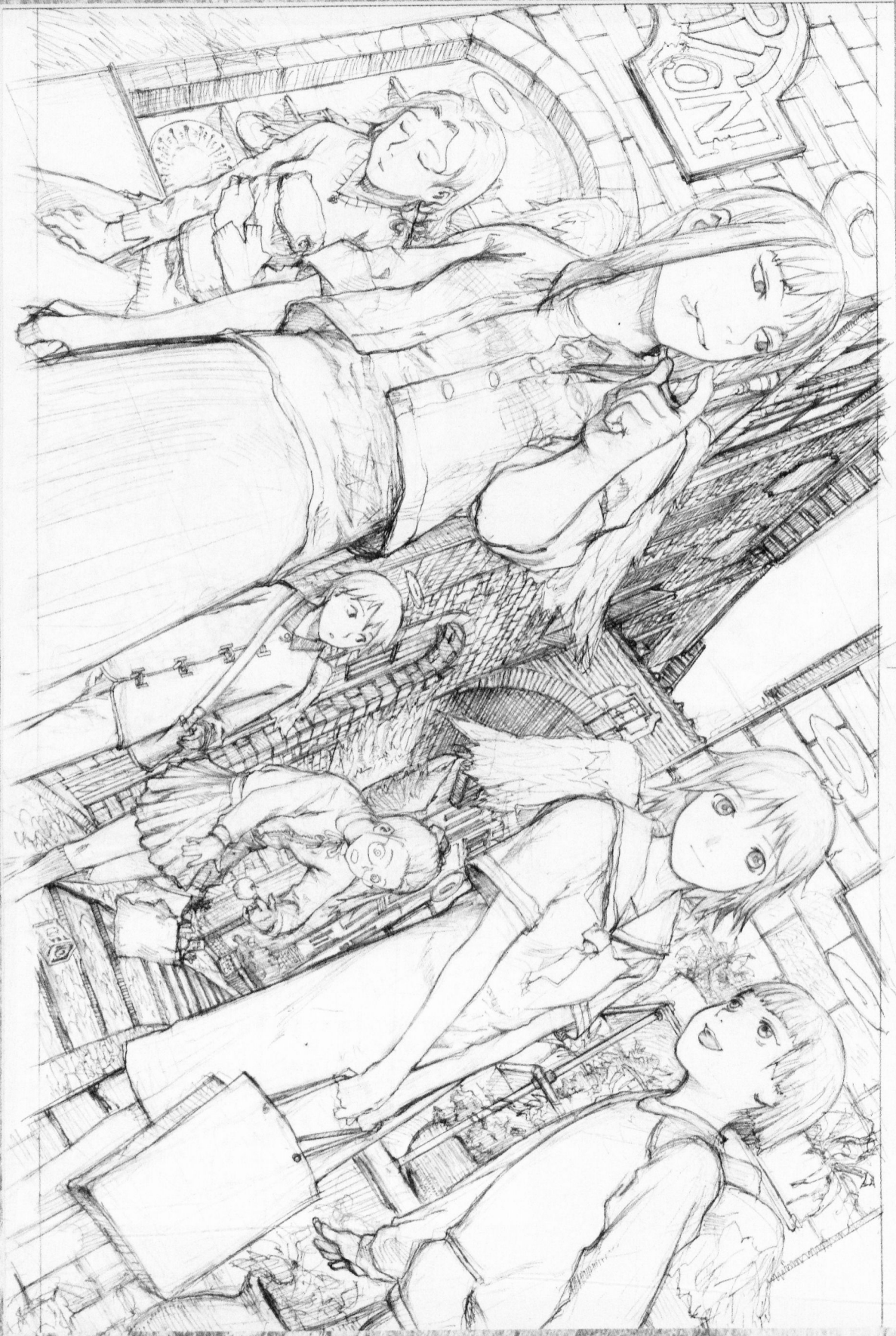
■このシーンは、最初アニメーションでやろうかという話になって、一応コンテを切ってもらったけど、アニメーションの絵柄では描けば描くほど、どうしても軽いというか嘘臭くなってしまっているので、誰か素人か、逆に芸術方面の人に描いてもらおうと、アマチュアの漫画描きの学生の方や、童話のアニメーションなどを製作している著名な作家の方など、色々あたってみましたが、スケジュールの問題などもあって、結局うまくいかなかった。最終的に前のページで説明したような形に落ち着いた。音楽や声の力もあって、かなり良い雰囲気になったのだけど、おかげで結構多くの人が『えっ、これで最終回？』と思ってしまうようだ。



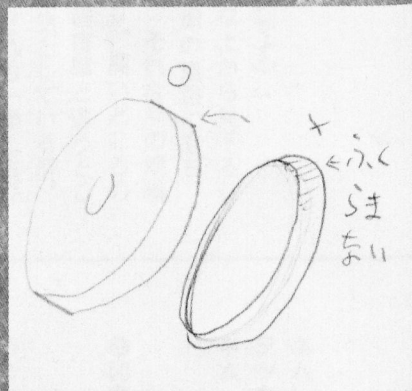
■上はサントラ『ハネノネ』のジャケット。使途不明のラフだが、もしかしたらこの時のラフかもしれないので合わせて載せてみた。正式なジャケットの方の絵は、ラフが見当たらないのと、迷い線が残っているので、トレスアップではなく一発描きかもしれない。

この時の羽の処理は、試行錯誤の中でひょっこりできた偶然の産物だが、とてもうまくいった。









■ネム。多分おまけシールのポツラフだと思う。わかかの絵は、灰羽関連の雑用メモの中にあったもの。使途不明。光輪の説明かとも思ったが、こんなに厚みはないし……。前々ページはニュータイプ用の版權イラストの線画。驚いた事に当たりもろくに取らずにいきなり描きだしている。完成図が頭に浮かんでいる時は手が速い。ページ中央が折り込まれる事を考慮して、キャラの顔が中央にかからないようにしている。完成図では、テクスチャを強めにかけた、くすんだバージョンと、プレーンな色のバージョンと2つ作って、後者が採用になった。

前ページは、使途不明。カゴなどの描き込みを頑張っているので、多分ちゃんとした版權イラストとして描いていたのだと思う。悪くない出来で、どうしてポツにしたのかよく分からない。背景が思い浮かばなかったからか……。でも、草原と空とかで前々大丈夫だと思っけど……。

次ページからは、5話の第一稿を掲載します。差分だけを……と思ったのですが、ペラで40枚近く縮めるために、構成を相当変えているので、差分がそのまま全文に近い状態になるので、そのまま掲載する事にしました。といっても、同じ物語なので、詰めて掲載します。

灰羽連盟

脚本・安倍吉俊

第05話 図書館・廃工場・世界のはじまり

第1稿 (2002.05.31)

○登場人物

ラツカ
ネム
レキ
ヒカリ
クウ
カナ
ヒヨコ(氷湖)・・・廃工場の灰羽。17歳くらい。男
ミドリ(緑)・・・廃工場の灰羽。16歳くらい。女
廃工場の灰羽、少年A 17歳くらい
廃工場の灰羽、少年B 15歳くらい
廃工場の灰羽、少年C 15歳くらい
スミカ・・・図書館司書25歳。女性
ハンバ・・・図書館司書36歳。男性
ショータ・・・灰羽の男の子
ダイ・・・灰羽の男の子
ハナ・・・灰羽の女の子

●サブタイトル

●図書館、書庫

ラッカ「ローワーロー（それほど大声ではないです）」

インディ・ジョーンズのラストのような上から見下ろしたアングルで、図書館の本棚と本棚の間の通路に立ち、上を見上げるラッカ。古びてはいるが、それなりの規模の図書館。書架も、天井近い高さがあり、高いところの本を取るためのハシゴもある。通常の図書館と違うところがあるとすれば、本の並びが非常に雑然としている所。巻数の揃っている本が非常に少なく、どれも一様に古びている。刷られたばかり、という感じの本はほほない。ラッカ、薄暗い通路を歩きながら、何気なく本棚に手を置く。滑らかに黒ずんだ木の枠は角が取れ、長い時間人の手に触れられ続けた事が伺える。

ネム「ラッカ。手伝って〜」

と、ネムの声。ラッカ、振り返り、速足で書庫を出る。

●図書館、階段

階段下で、ネムが本が積まれたカーゴ（空港で荷物を運ぶような、車輪のついた板に取っ手がついたもの。ちゃん造り）を押してやってくる。カーゴは古く、車輪がたついていて、いかにも重そう。

ラッカ、ぱたぱたと階段を駆け降りてくる（開館前だけでなく図書館なので多少気を使っています）。ネム、降りてきたラッカの足を指さし

ネム「それ」

ラッカ「え？あ」

ラッカ、足元を見る。階段の手すりの下に、カーゴが通れるくらいの幅の板が立て掛けてある。板の下部は蝶番（ちょうつがい）で手すりの下に固定され、板の上部は、不意に倒れないように紐で手すりに結ばれている。ラッ

カ、紐をほどいて、板を倒し、カーゴが登れるようにする。ネム、ラッカと二人がかりでカーゴを板の上に寄せ、押し上げてゆく。

ネム「今日はなんでこんなに多いんだろ。ラッカがいて良かった」

ラッカ「この本、返却分？」

ネム「ちがう。街の外から来た本。ホラ、こないだトーガが来たじゃない。あの時のトーガの交易品の中にあったんじゃないかな」

●図書館、カウンター前

カーゴを運んでいるラッカとネム。

ラッカ「トーガは本を運んでくるの？」

ネム「トーガは何でも運んでくるよ。本もそうだけど、食べ物とか、服とか、見た事もない機械とか。レキのスクーターとか、自転車も、もとはトーガの交易品じゃなかったかな」

ラッカ「へえ……」

ネム「機械はバラバラの部品で来る事が多いから、大変らしいよ。街の東に、昔の工場跡があって、変な機械はそっちに集められて、トンテンカンテンやってみたい」

ラッカ「詳しいんだね」

ネム「奥に、トーガが持ってきた、使い道分からないもの展示室があるから」

ネム、カーゴから本を取り出し、カウンターに積んでゆく。

ネム「これ、返してくる。まだしばらくは暇だから、その辺の本、適当に読んで」

空になったカーゴを押して、出ていくネム。ラッカ、積まれた本から適当に1冊選び、ぱらぱらとページをめくる。『ふしぎの国の物語 2巻』と書かれた童話（いや、なんでもいいんですけど）。同じ表紙の本が数冊あるのを見て、整理しようとするラッカ。だが1巻がない。

ラッカ「あれ？」

ラッカ、こそこそと本の山をかき回すうち、うっかり山を崩してしまう。

ラッカ「わっ」

ラッカ、寸前のところで本の雪崩を食い止める。そこへ戻ってくる。

ネム「なにやってんの」

ラッカ「た、たおれる」

危なっかしく本を支えているラッカ。ネム、手伝ってやる。

ネム「仕事ふやさないでよねえ（悪意のある感じでなく）。ただで

さえいっそがしいんだから」

ラッカ「う、ごめん」

ネム「うそうそ（笑って）。でも忙しいのはホント」

ラッカ「そうなんだ」

ネム「なにしろ、いつ、どんな本がくるか分からないんだもの。台

帳つくるだけでもひと苦労よ」

ラッカ「あ、それで……」

ネム「え？」

●事務室

目録の詰まった仕分け棚が壁を覆っている。ごちんまりとした部屋に机が4つ程。人はいない。どの机も書類や本が積まれていて、雑然としている。

ネム「……そうそう。1巻がないなんてまだいい方よ。長大な物語を10巻まで読んで、11巻がなかった時のショックといっ

たら……」

ネム、がつくり、という芝居かがった仕事で椅子に座る。

ネム「……って、これじゃ誰も本を読もうなんて思わないじゃない。だから、日々こつこつと目録を作って、どんな本がどこにあるのかちゃんと把握しておかないといけないわけ」

ラッカ「大変そう」

ネム「まあね。最近では、とにかく手分けして、地下の閉架書庫も含めて全蔵書のリストをつくらうって話になってるみたい。要するにさ、ここはまだでっかい本の倉庫なのよ。図書館じゃなくて」

ネム、机の上の本の山をぼんと叩き

ネム「整理するたびにこれだもの」

がちやっとドアを開けて、人間の女性（スミカ）が入ってくる。25歳くらい。ぱりつと化粧をしている。都会的な感じ。マタニティドレスを着ていて、ややお腹が目立ち始めたくらい。

スミカ「おっはよー。あれ、早いじゃない。びっくり」

ネム「あれ、じゃないわよ。いるの知ってて挨拶したくせに。……

……いいの？」

スミカ「ネムまでやめてよ。家で気い使われすぎて逃げ出してきたのに。えーと、あつ、こっちがびかびかの新生子ちゃん？」

ネム「なんか私がホコリかぶってるみたいな言い方ね。（ラッカを指して）この子はラッカ。ラッカ、そっちがスミカ」

スミカ「よろしくう」

スミカ、元気に手を差し出す。ラッカ、ちよつとびっくりしつ、手を出す。スミカ、にーつと笑って元よく握手。

ラッカ「ど、どうも……」

ラッカ、ちよつと圧倒される。スミカ、けらけらと笑い
スミカ「よろしくつたつて、私、今月いっぱい辞めちゃうけど」

ネム「今月……って、あと……4日しかないけど？」

ネム、ちよつと虚を突かれた感じ。スミカ、鞆を自分の椅子にひっかけ、書類で散らかった机をがさがさと漁る。

スミカ「形の上ではね。まあ、後任が決まるまで手伝うわよ。力仕事はムリだけど」

ネム「ムリしなくていいよ。それにしたつて、ずいぶん急じゃない。準備できてるの？」

スミカ「いやーもう大変。仕事の引き継ぎやら書類の手続きやら

そうだ、館長来てる？」

ネム「上じゃない？」

スミカ「面倒なのから先に片づけっかなー。じゃ、ネム、また後で。ラッカちゃんも」

スミカ、ばたばたと出ていく。最後までノリについていけなかったラッカ。

ラッカ「今のは？」

ネム、ちよつとうらやましそうに

ネム「スミカ。ここの司書で、まあ私の先輩かな。……あ、元先輩か」

ラッカ「やめちゃうんだ……」

ネム、ほおづえを突き、ぼんやりとスミカの出でいったドアを見る。

ネム「……まあ、人生の選択肢つてやつね」

●書庫

朝の書架整理をしているネムとラッカ。左腕に図書館職員
の腕章、胸には名札を付けている。ラッカのは見習い
マーク入り。

ネム「基本的にはラベルの順番通りに本を並べればいいの。でも、
何しろ無計画に本が入ってくるから、きれいに順番通りになっ
てないのよね」

ラッカ「たいへん」

ネム「順番は分からなくていいから、明らかに間違つた場所にある
本だけのけといて。戻すのは私がやるから」

ラッカ「うん」

ネム「あとは、とにかく古い本ばかりだから、痛んでる本を見つけ
たらそれも集めて。あとで修繕するから」

ラッカ「あ、これ……」

ラッカ、一冊本を取り出す。背表紙がはがれかけている。
ネム「うん、そういうの。なにしろ外から入ってくる本は、みんな

大昔に書かれたものばかりだから」

ラッカ「そっか、これ、この街の外で書かれたものなんだ」

目を輝かすラッカ。

●書庫、30分経過

ネム、一人で書架整理をしている。棚の縁に指を乗せて、
それを滑らせながら、目で本の配置や状態を確認してゆ

く（あいうえお順かアルファベットか要相談）。

ネム「は……ひ……ふ……へ……ほ、と。よーし」

クリップボードのような堅い板の上に乗せた書類に、耳
に挟んだ（あるいはボードにとめてあった）鉛筆でチェッ
クをいれてゆくネム。一段落したところで

ネム「ラッカ、終わつたあ？」

ネム、ひよいと首を出して、ラッカが作業をしているは
ずの隣の列の棚を覗く。ラッカ、しゃがんで本を読みふ
けている。

ネム、あきれてラッカに歩み寄るが、ラッカは気づきも
しない。

ネム「こら」

ネム、鉛筆の先でラッカをつつく。ラッカ、夢から醒め
たように

ラッカ「あ？あ！ごめんなさい、つい……」

ネム「いいよ、あとは私やるから、座つて読んだら？」

ネム、閲覧室を指さす。ぶるぶると首を振るラッカ。

ラッカ「ううん、やるやる、ちゃんとやるから」

ネム「……（苦笑して）じゃ、私カウンターにいるから、分から
なかつたら呼んで」

●書庫、さらに15分後

大慌てで蔵書チェックをしているラッカ。

ラッカ「えーと、えーと……これは童話だから別な棚の本……
……かな」

本を取り出し、ラベルを調べるためにぱらぱらとページ
をめくる。古いペン画の挿し絵。人魚の絵。

ラッカ「わー……」

また本にのめりこんでしまうラッカ。

●書庫、さらに時間経過

一般の入館者が入り始めている。来館者の一人が、ラッ

力を怪訝そうに横目で見ながら通り過ぎる。

スミカ「いつの間にかラッカの背後に立っている。」

スミカ「そんなに本が好き？」

耳元で突然話しかけられて、飛び上がるラッカ。

ラッカ「ひゃっ……あ、あれ？」

スミカ「陽が暮れちゃうよ」

ラッカ「す、すいません……」

スミカ「す、すいません……」

スミカ「分る分る。でも、もうお客さん入ってるから」

ラッカ「わ、いつのまに……」

スミカ「なんでだろう、さっきまでちゃんとやってたはずなのに……」

ラッカ「わ、いつのまに……」

スミカ「こりゃ重症だわ。ネムが呼んでるから、ぱっぱと片づけちゃおう。あとこの列だけでしょ？」

ラッカ「はい」

スミカ「鼻歌まじりに棚を見ていく。楽しそう。手早く数冊の本の位置を入れ替える。」

ラッカ「憶えてるんですか？」

スミカ「あ、先月まで私の受け持ちだったから。4カ月毎に受け持ちの棚が変わるの」

ラッカ「へえ……」

スミカ「片膝をついて下段の棚を調べながら、ラッカの方を見ずに」

スミカ「さっき、熱心に何を読んでいたの？」

ラッカ「何ってわけじゃないんですけど……。この街の外に何が

あるのか、どこかに書いてないかなって……」

スミカ「で？見つけた？」

ラッカ「少しうつむいて、クリップボードを軽く抱えるようにして」

ラッカ「いえ……。嘘とホントの見分けがつかないから」

スミカ「ん？」

スミカ「ラッカを見上げる。」

ラッカ「本の中に、『うみ』っていう言葉がありました。見た事な

いけど、『うみ』って分かるんです。なんとなく」

スミカ「へえ」

ラッカ「波の音とか、風の匂いとか。だから、それはあるのかわかんないわよおー。こんな羽のついた女の子だっているんだもん」

ラッカ「うん。……だから、わかんないんです」

スミカ「ちょっと真顔になる。」

ラッカ「こんなにくさん本があつて、いろんな事が書いてあつたら、どれが本当のお話で、どれが空想なのか……」

スミカ「ふうん。木を隠すなら森の中ってやつね。なるほど。でも、灰羽って不思議ね。ラッカちゃん、生まれたばかりなんでしょ？」

ラッカ「はい……」

スミカ「でも、言葉も分かるし、いろんな事知ってる」

ラッカ「知ってるって言うか、ぼんやり憶えてるんです」

スミカ「ネムも昔そんな事いつてたな。その記憶って、どこから来たのかしら？」

ラッカ「分からないんです。でも、ときどき、なにか思い出さなきゃいけないことがあるような気がして……」

スミカ「ちょっと深刻そうなラッカ。スミカ、励ますように」

スミカ「焦る事ないって。のんびりやりのよ」

●カウンター

ネム「随分のんびりやってたわねえ」

スミカ「あはは。ごめん。ミイラ取りがミイラってやつ？」

ラッカ「……ごめん」

スミカ「用って？」

ネム「カウンター、ちょっと代わってもらえる？お話お姉さんの出番だつて」

ネム、入り口を見る。レキ、クウ（帽子あり）、ヒカリ

が子供たちを引率して来ている。

8

7

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

レキ「顔見がてらにね。ちよつと課外授業をば」
クウ「やっほ〜」

レキ「クウ！チビ共が真似するから。お手本になるんだろ？」
クウ「そうだった」

大げさに口を押さえるクウ。

ヒカリ「ラッカ、頑張ってる？」

ラッカ「……はは」

ラッカ、苦笑い。

スミカ「今日は忙しくなりそうね。私来て大正解じゃん」

スミカ、カウンターの裏側に回る。ネムと小声で会話。

ラッカ、まといつく子供たちの相手をしながら、なんと

なくそれを聞いている（以下、小声の会話）。

スミカ「館長とハンバさんは？」

ネム「ハンバさん先にお昼行ってもらった。館長は閉架書庫どうす

んのかってまだ会議してる」

スミカ「うへ。人手不足ねえ。気が咎めるわん」

ネム「気にしないで。新婚さんだもんね」

スミカ「えへへへへへ」

ネム「やだ、もう」

ラッカの目には、ネムもスミカも、きちんと働いて自立

している大人に見える。

特にネムを見ていると、年下の自分たちより、年上のス

ミカの方が話しやすそうに見える、ネムは自分が考えてい

た以上に、本当は大人なのかもしれないなど、ふと考え

る。

ネム、席を立ち、ラッカ達の方へ歩いてくる。

ネム「さて、何の本を読んであげましょうかね」

ラッカ、みんなと連れだつて入り口脇に小さく仕切られ

た子供部屋へ。振り返ると、スミカがてきばきと応対を

しているのが見える。

● 子供部屋

ネム「……こうして悪い魔法使いは、自分の唱えた魔法が鏡に

跳ね返って、醜いカエルになってしまいました。若者は鏡の裏からさつと飛び出して、お姫さまを助けるために、高い高い塔の階段を登ってゆきました」

本を読むネム。かたずを呑んで聞き入っている子供たち。

ラッカやクウやヒカリも、真剣に聞いている。

ネム「こうして、若者とお姫さまはいつまでも幸せに暮らしましたとさ」

子供たち、わーっと拍手。ラッカ達も一緒に拍手。

ネム「やめてよ、照れるじゃない」

レキ「ホラ、お話お姉さんにありがとうは？」

子供たち「ありがとー」

ショータ「カエルにしちゃうぞ〜。びびび〜」

ダイ「やくめ〜ろ〜よ〜」

レキ「コラ！悪もんのマネしてどうする！」

ネム「女の子向きの話だったかな？」

レキ「いや、よかったよ。こいつらがこんな長い事おとなしくして

たの初めてだ。これからちよくちよく来ようかな」

ネム「次からはあんたがやんなさいよ」

レキ「えー」

● 図書館、階段前

帰り際。レキ達を見送るネムとラッカ。

レキ「でも、随分感じ変わったなあ、こゝ。前は学者しか来ないよ

うな感じだったのに」

ネム「でしょ。苦労してるのよ。いろいろね」

クウ「びびび〜」

ハナ「えい」

ハナ、手鏡をクウに向ける。

クウ「わ〜やられた〜」

ヒカリ「クウってば……」

レキ「ホラ、魔法は外でやんな」

ネム、笑って

ネム「じゃ、気をつけて。夕食私たち（ラッカの事）で買って帰る

ね」

レキ「助かる。あ、そうだ。私も買い物あるんだ。ヒカリ、チビ共連れて帰れる？」

クウ「びびび……ええ？」

ヒカリ「クウ、先生の代わりだって」

クウ「ほんと？やる！」

レキ「助かる。じゃ」

レキ、ネムとラッカに手を振り、歩き出す。後に続く、子供たち、ヒカリ、クウ。

ネム、皆が階下に消えると、うん、と伸びをして

ネム「あー肩凝った。レキもよく毎日子供の相手する気になるわよね」

ね」

ネム、ラッカ、カウンターに戻るために歩き出す。

ラッカ「ネムだって、子供好きそうに見えただけ」

ネム「たまにだからよ。毎日絶対無理」

●カウンター前

カウンター。相変わらず来館者はまばら。スミカとハンバが世間話をしている。

ネムとラッカ、入り口から入ってくる。

ネム「ごめん、遅くなつて」

スミカ「あー来た来た。じゃ、私はこれで。ラッカちゃんもまたねえ」

ラッカ「はい」

バッグを肩から提げて、手をひらひらとふり、出ていく

スミカ。

ハンバ、スミカが出ていくのをぼーっと眺めている。スミカの姿が見えなくなると、ふと我に返り

ハンバ「聞いたかね、スミカ君、今月いっぱいだつて」

ネム「今朝聞きました。でも、後任決まるまで手伝ってくれるとか」

ハンバ「そうはいつでも、無理は言えんだろう。身重なんだし。あ

あ、でも閉架書庫の整理、スミカ君がいるうちにやった方がいいかなあ……」

腕を組み、心配そうに天を仰ぐハンバ。顔を見合わせるネムとラッカ。

●図書館入り口、夕方。

陽が傾きかけている。

中同様、古びた外観の図書館。ラッカ、入り口の階段脇に、一人で所在なげに立っている。ドアを開けてネムが出てくる。

ネム「ごめん、明日の打ち合わせがちよつと長引いて」

ラッカ「ううん。それよりごめんね、あんまり役に立たなくて」

ネム「十分よ。それに、ラッカの意外な本好きが分かったし」

ラッカ「ネムだつて」

ネム「私は昔からよ。……ああ、でも、あと4日かあ」

ラッカ「え？」

ネム「スミカの事。お祝い、考えてたんだけど、間に合うかな」

ラッカ「なあに？編み物？」

ネム「ナイショ」

ラッカ「えー。教えてくれたら手伝うのに」

ネム「うーん。考えとく……」

夕暮れの街。メインストリートからちよつとはずれた辺り。遠くに、トートバッグに荷物をいっぱい詰めて歩いているレキの後ろ姿。

ラッカ「あ、レキだ」

ネム「どこ……？あ、ホントだ」

ラッカ「ね、そーつと近づいて、驚かしちゃおうか」

顔を見合わせ、笑い合うネムとラッカ。

●街、東地区

十字路。ラッカ達がひよこつと顔を出す。

ラッカ「あれえ？もういない」

ネム「あのせかせか歩きめ」

ラッカ、遠くにレキを見つけて

ラッカ「あ、いた。あれ、道、逆だよな？」
 ラッカ、ネムを振り向く。真顔になっているネム。すたすたと歩き出す。慌てて青を追うラッカ。

● 工場橋前

廃工場地区と市街地を隔てる河にかかる大きな橋の近く。人通りはない。

橋の前に、ぼんやり立っているレキ。橋の向こうから、日に焼けた老人が、レキのスクーターを押して歩いてくる。

レキ、手を上げ、橋の中ほどまで歩いてゆく。橋の中ほどには、車両の交通を制限するような踏み切りがある。

老人、レキにスクーターを渡す。会話は聞こえない。レキ、老人に軽く頭を下げる。老人、破顔してレキの腕を軽く二、三度叩く。

ネムとラッカ、その様子を、少し離れた街頭の陰から見ている。

ネム「ああ、ガソリンか」

ネム、ほっと息をつき、安心した様子。

ラッカ「なに？」

ネム「ああ、スクーターの燃料。あのおじいさんはガス屋さん。台所のプロパンとかも扱ってるのよ」

ラッカ「ふうん……」

レキ、荷物をスクーターの荷台に固定し（ちよつと考慮中）、煙草をつけ、スクーターにまたがり、走り出そうとする。不意に、橋の向こうから、ドロドロとバイクのエンジン音と派手なクラクションの音。口笛。

レキ、はっと橋の向こうを振り返る。橋の向こうからヘッドライトをもろに当てられ、目を細める。数人の灰羽の少年たちがオンポロのハーレーに乗って、走ってきたところ。橋の近くでバイクを止め、口々にはやし立てる。

廃工場の少年A「ほーらみる、やっぱレキじゃん」
 廃工場の少年B「ひいーめ様あー元氣いー」

レキ、顔が険しくなる。

廃工場の少年C「レキ？誰よ？」

廃工場の少年A「ホラ、前に言っただろ、ヒヨコのアレ」

廃工場の少年C「あーあーあー」

廃工場の少年B「おいヒヨコに会いにこねえの？来れねえか、往

来禁止だもんなあ！」

少年たち、バイクを降り、橋げたや、踏み切り部分など、

思い思いの場所に座り、橋のこちら側にいるレキと対峙

する。バイクの後部席に乗っていた少女が、周囲より一

歩レキに近づいて、レキをにらむ。

ミドリ「なによ煙草なんてふかして。わざわざ会いに来たって、氷

湖はもうアンタとは会わないわよ（ミドリのみ、ヒヨコを

『ひようこ』と発音します）」

少年たち、どつと沸く。

廃工場の少年A「あーあーミドリが怒っちゃまった」

ヒヨコ「なに騒いでんだよ」

わいていた声が一瞬静まる。バイクが走ってきた道の反

対側から、スケートボードに乗った少年が現れる。

少年は目深に帽子をかぶり、リュックを背負っていて、

羽も光輪もない（見えない）

廃工場の少年A「噂をすればヒヨコじゃん。おいヒヨコ、あれ見

ろよ。おめえのお姫さまだぜ」

廃工場の少年A、レキの方を向いてガムをぶーつと膨ら

まし、ぱちんと割る。

ヒヨコ、振り向く。レキと目が合う。

ヒヨコ「レキ」

ミドリ、ヒヨコの腕をつかんで

ミドリ「行きましょ。相手する事ないわよ」

ヒヨコ、ボードから降り、ミドリを一瞥もせず無視し

て、毅然とした態度でレキの方につかつかと歩いてゆく。

背後で少年たちがヒューヒューとはやし立てる。

ミドリ「もう」

橋の市街地側、レキのスクーターの前でびたりと足を止

めるヒヨコ。レキが何か言うより速く、横面を張るような動作で、レキのくわえていた煙草を奪い取る。

レキ「なにすんだよ！」

ヒヨコ「こんなもん吸うな！馬鹿。バイクもやめろ！」

レキ「バカはテメエだ！こいつは街の許可とって、天下御免で乗っ
てんだ」

レキ、お返しとばかりに、ヒヨコの帽子の糸（小学生の体育帽のように、両耳の辺りに糸をつけて、アゴの下で結んでいる）をぶちつとむしり取る。帽子はびっくり箱のようにぴよこんと飛び上がる。跳ね飛んだ帽子の下から光輪が見える。

ヒヨコ「あつわつわつ」

と、帽子を慌てて押さえるヒヨコ。驚いた拍子に、背中
のリュックから、羽の先がばさつと顔を出す。

レキ「ばあーか」

レキはバイクをスタートさせて、走り去ってしまう。

廃工場の少年A「ザンネーン。ヒヨコ、おめえの負けだよ」

と、やじられるヒヨコ。周囲からもからかいや口笛が飛ぶ。一連の光景を呆気にとられて見ているラッカ。ネムに袖を引かれる。

ネム「ホレ、他人のフリ他人のフリ。巻き込まれないうちに行くわよ」

●帰り道。街はずれ

帰り道、レキの話をするラッカとネム。

ネム「灰羽の繭が生まれるのは、人が捨ててしまった古い建物って決まりなの。それは知ってるよね。東の廃工場も灰羽の巣でね、あつちはなんて言うか、男女共学なのよね。うらやましいことだ」

ラッカ「へー……。さっきの帽子の人も、廃工場の灰羽なの？」

ネム「そ。昔、いろいろあったのよ、あの二人」

ラッカ「い、いろいろって？」

ネム「あの頃はまだ、オールドホームに私とレキと子供たちしかい

なくて、レキは、なんていうか、荒れててね」

ラッカ「……………」

ネム「まだ今のゲストルームにしか電気が通ってなくて、二人で一緒に住んでただけど、いろいろあって大げんかしてさ、レキはオールドホームを出ていっちゃって。しばらく行方不明だったんだけど、あとで聞いたら廃工場のさっきの子と駆け落ちしててさ」

ラッカ「うわーうわー」

ネム「……………ついでついでも、狭い街だからねえ。南東の農地に廃屋がいくつかあって、街の中ふらふらしたあと、その辺りに潜んでただけど、男の子が肺炎なんかで倒れて、レキが医者呼んでバレておじゃん」

ラッカ「……………すっごーい。駆け落ち。かっこいい」

ネム「真似しちゃダメよ。街の自警団と灰羽連盟に嚴重注意されて、

レキは東の廃工場地区往来禁止、相手の男の子もオールドホームのある南地区には来れなくなっちゃったんだから」

ネム、ポンポンと話してしまつてから、ちよつとぼつが

悪そうに

ネム「あと、これ話したのレキにはナイショね。みんなにも」

ラッカ「うん。……………お姫さまって……………」

ネム「それも絶対口外しない事。間違つてもレキに聞いたりしない
でね」

ラッカ「うん……………」

ネム「あーあ、共学もいかなと思つたけど、廃工場の男の子達は嫌い。ガサツで」

●オールドホーム、ゲストルーム

カナ「おせー！餓死するかと思つたよ」

クウ「ぐぐ」

ネム「ごめん、待つてくれたんだ」

食卓に着いているカナ、クウ、ヒカリ、レキ。食材の入った紙袋を両手で抱えて帰ってきたばかりのラッカとネム。

レキ「待つてるも何も、自分が夕飯の買い出しするついでにたんじゃ

ない」

ネム「そうでした。ちょっと残業でね」

ネム、食材の袋を持って台所ののれんの向こうに消え、
語尾は曖昧に。

ヒカリ「ラッカも？」

ラッカ「う、うん」

レキ「ラッカ、街に慣れるまではそんなに根詰めなくていいんだよ」

ラッカ「……大丈夫。元気だよ」

ラッカ、荷物を持って手がふさがっているの、羽をふつて見せる。

ラッカ「ネムを手伝ってやる」

台所に行くラッカ。心配しすぎかな、という感じで微苦笑で見送るレキ。

●ゲストルーム、ベランダ。夜

薄暗い部屋。ベランダに続くドアは少し開いていて、カーテンがかすかに揺れている。床に落ちた月の光は窓枠とラッカの姿を映している。

ベランダ。ラッカ、ぼんやりと歩いている。何気なく手すりに手を置き、外を見る。オールドホームの時計台に、明かりが見える。多分カナだろう、と、ラッカは少し微笑む。空には少し朧（おぼろ）がかった、大きな月（月の状態は1話の状態から計算）。

ラッカ（モノローグ）『私の記憶の中には、もう一人の私がいる。

ネム達は違うといったけど、海の匂いを覚えていて私、月の満ち欠けを知っている私というのが、自分の中に確かにいるのだと思う。羽が体に馴染んだら、この違和感も消えるのだろうか……』

両手を手すりに置き、その上に頬をうずめるラッカ。ゆつくりと羽をゆする。

ラッカ（モノローグ）『オールドホームの暮らしには、随分慣れた。たかさんの発見があった。レキも、ネムもヒカリも、カナも、小さなクウでさえ、仕事を持ち、精一杯生きている。毎朝元

気な顔で挨拶しても、本当は、大変な事や、つらい事がその裏側にあつたりする。よく考えれば当たり前の事だけど、私はこの街に来て、初めてそれを知った気がする。記憶の中の私は、もしかしたら、自分しか見えていない、心の狭い人間だったのかもしれない』

ラッカ（声に出して）「いいのかな、私………こんなに幸せで………」

●図書館、書庫

朝の書架整理をしているネム。おお欠伸（あくび）。

ラッカ「おはよう」

ネム、びっくりする。

ネム「ラッカ、あれ、もうそんな時間？」

ラッカ「ううん。開館まであと10分。守衛さんに聞いたら入っていいって」

ネム「へえ、で、どしたの？」

ラッカ「ネムこそ。今朝起きたら、もういないから」

ネム「ああ、今日から、朝と閉館後に1時間ずつ、全館の蔵書チェックをする事になったの。まあ、できるだけって事だけど」

ラッカ「手伝っていい？」

ネム「ん。そりゃいいけどさ。次、夕方だよ」

ラッカ「じゃ、それまで本読んで待ってる」

ネム「えー。（驚き、ふと、何かを思いついた顔）そうだよ、調べもの頼まれてくれる？」

ラッカ「いいよ。何？」

ネム「世界の始まりについて。おとぎ話でも歴史の本でもいいから」

ラッカ「調べて、どうするの？」

ネム「調べたら教えてあげる。あ、スミカにはナイショにね」

何かを察してにっこり笑う。

ラッカ「うん、わかった！」

たた、と書架の間の通路をかけてゆくラッカ。くすくす笑いするネム。

●閲覧室、午後

書庫の手前の机の一角。本の山を築いているラッカ。百科事典のような大きな厚手の本と格闘中。

スミカ「うわ、どうしたの？調べもの？」

ラッカ「あ……………」

ラッカ、本から顔を上げる。机の前にスミカが立っている。鞆をぽんと机に置き、ラッカの隣に座るスミカ。

ラッカ「いえ、なんでも、ないです……………」

本を立てて、首をすくめてその中に隠れるラッカ。

スミカ、積み上げられた本を見る。

スミカ「ああ、歴史の本か。私も昔よく読んだなあ」

スミカ、懐かしむように積んである本を撫で

ラッカ「え？……………ええと、一番最初に世界をつくった……………人？」

スミカ「人じゃないかもしれないけど、うん、そういう存在。ラッカちゃんはず、カミサマ……………」

ラッカ「……………うーん。わかんないです。見た事ないし」

スミカ、笑う。

スミカ「そりゃそうよね。私も子供の頃そう思った。……………で、いるなら会ってみたくてさ、昔の話だけど、街を出ようと思っ

てたんだ」

ラッカ、びつくりしてスミカを見る。

スミカ「ここには、いろんな世界のいろんな時代の本がだらけに揃ってるでしょ。でも、どの本も、世界の始まりはおんなじ。

カミサマが出てきて、世界や動物や木々や人間をつくるの。海で隔てられて、一度も会った事がないはずの人々も、なぜかみんな同じことを思うの。不思議でしょ」

スミカが開いた本には、世界創世の図が載っている。ラッカ、うなづく。

スミカ「世界中を旅して、本当の世界の始まりが知りたかった。それが分かれば、この街がどうしてできたのかだって分かるかもしれないしね。そう思ってたんだけどさ」

スミカ「もちろん後悔はないし、夢は夢のままだから美しいのかな、とも思うけど、ときどきそんな夢みたいな事を考えずにはいられない。あーあ。人生って難しいわあ」

両手を頭の後ろで組んでのんきに笑うスミカ。それをぼんやり見るラッカ。

スミカ「自分の席で、書類仕事（台帳のチェックか何か）をしている。眠そう。欠伸（あくび）をし、肘をついてあごを支える。すくなくくーと眠ってしまう。ラッカ、入ってくる。ネムを見て、肩を揺すって起こそうとするが、ふとその手を止めて、優しい目でネムの寝顔を見守る。

不意に終業のチャイム。ネム、はつと目を覚ます。辺りをきよるきよる見て、すぐにラッカと目が合う。

ラッカ「やだ、見てないで起こしてよ」

ネム「……………なんか、あんまり幸せそうに眠ってたから」

ネム、ぼつが悪そうに、机の台帳をとんとんと叩いて揃え

ネム「……………本、あった？」

ラッカ「うん、たくさん読んだよ。世界のはじまりって、いろいろなものがあるんだね。気に入っただけメモしてきた」

ラッカ「ありがと、助かるわ」

●事務室

スミカ、お腹を撫でる。遠くを見る目。

ラッカ「……………」

ネム、机の引き出しから、一冊の本を取り出す。書庫の本とは明らかに違う、布張りの真新しい装丁。文庫本くらいの大きさで、ホックで留められるようになってる。金の糸で『世界のはじまり 作・ネム』と刺繍されている。

ネム「……………本、あった？」

ラッカ「うん、たくさん読んだよ。世界のはじまりって、いろいろなものがあるんだね。気に入っただけメモしてきた」

ラッカ「ありがと、助かるわ」

ラッカ「……………本、あった？」

ラッカ「うん、たくさん読んだよ。世界のはじまりって、いろいろなものがあるんだね。気に入っただけメモしてきた」

ラッカ「ありがと、助かるわ」

ラッカ「……………本、あった？」

ラッカ「うん、たくさん読んだよ。世界のはじまりって、いろいろなものがあるんだね。気に入っただけメモしてきた」

ラッカ「ありがと、助かるわ」

ラッカ「……………本、あった？」

ラッカ「うん、たくさん読んだよ。世界のはじまりって、いろいろなものがあるんだね。気に入っただけメモしてきた」

ラッカ「ありがと、助かるわ」

ラッカ「……………本、あった？」

ラッカ「うん、たくさん読んだよ。世界のはじまりって、いろいろなものがあるんだね。気に入っただけメモしてきた」

ラッカ「ありがと、助かるわ」

ラッカ「わあ！これ、どうしたの？」

ネム「本の修繕してる職人さんに頼んだの。昔スミカとこういう物語があつたらいいなって話をしててね」

ラッカ「読んでいい？」

ネム「わ、笑わない？」

ラッカ「もちろん」

ラッカ、本を読み始める。ネム、ラッカがとなりで楽しそうに「ふーん」「へー」などと言うたびに、ちらちらとラッカを横目で見たり、手をもじもじしたり、赤くなったりと落ち着かない。

ラッカ「あれ、ここまで？」

ネム「う、うん、最後がなかなか決まらなくて。どんな風にしたらいいかな」

ラッカ「え？うーん……」

ラッカ、こめかみに指を当てて、思索顔。

ネム「今日、いろいろ本読んだんでしょ？なにか思いつかない？」

ラッカ、ネムをちらつと見て

ラッカ「……笑わない？」

ネム「もちろん」

ラッカ、ネムに耳打ち。

ラッカ「ごによごによごによ」

ネム「うんうん……」

ラッカ「……でね、ごによごによごによ」

ネム、盛大に吹き出す。

ラッカ「あーっ！笑った。ひどい！」

ネム、お腹を押さえて苦しそうに

ラッカ「ま、真面目に考えてよ！」

ラッカ「真面目だつてば。さつき、ネムの寝顔見てて、ちょうどそんなこと考えてたの」

ネム「し、失礼ね！だめよ！これは、世界で一番えらい人のお話なんだから」

ラッカ「そのお話はネムが考えたんでしょ？」

ネム「そうよ」

ラッカ「じゃあ、その本の世界で一番偉いのはネムだよ。だからネ

ムの事でいいんじゃないかな。そうしたらさ、この本読んだ人がネムの事、思い出せるじゃない」

ネム「私そんな行儀の悪い寝方しないつてば！ひどいわねえ」

ネム、本をしまつて立ち上がる。

ネム「もつと品格のあるアイデアを募集します。さ、残業残業」
つかつかと出ていくネム。笑つて後に続くラッカ。

●中央広場、夕方

夕方遅く。夕方と夜の間くらい。時計台裏手。カナが自転車をはいて出てくる。

カナ「お先に失礼します」

カナ、自転車でまたがつて走り出す。不意にラッカの声。

ラッカ「カナ！」

カナ、振り返る。ラッカが駆けてくる。自転車を止めるカナ。

ラッカ「よかつたあ。荷物重くて羽が曲がりそう」

ラッカ、持っていた肩から担いでいた鞆を、自転車の籠に入れる。重さでハンドルをとられ、慌てて両手でハンドルを握るカナ。

カナ「わっ……なにコレ？」

ラッカ「本。いっぱい借りちゃつた。残業もあるし、もうくたくた」

ラッカ、自転車の荷台に座る。カナ、しぶしぶ自転車を漕ぎ出す。

カナ「ネムは？」

ラッカ「残業の残業」

カナ「あん？」

ラッカ「本の修繕技師の人に話があるんだつて」

カナ「はーん。きつとまた居眠りしてさあ、すげー大事な本に、

ヨダレの染みでもつけたんじゃないの」

ラッカ、笑う。

ラッカ「はは、そうだったらネムらしいね。でもさ、一緒に働いて思ったけど、ネムってほんとすこいしっかりしてるよ」

カナ「そりゃそーだ。普段やることやってるから、居眠りしても誰

も怒らないのさ」

ラッカ「……………なるほど」

カナ「あぎれるけどね」

二人、笑う。前方にカフェが見える。

ラッカ「あれ、クウじゃない？」

カナ「あ、ほんとだ。まあ角砂糖せびつてやがんな」

●カフェ

カウンターでパイプを吹かし、皿を拭いているマスター。

何かを手たたた、と入り口に走るクウ（帽子あります）。

振り返つて

クウ「ありがとう」

マスター「おう」

クウ、走り去ろうとして、ふと思いついたように足を止

め

クウ「そうだ。さよなら」

クウ、ぴたっと気をつけの姿勢。そしてふかぶかとお辞

儀。マスター、拭いていた皿を軽く振って見せ

マスター「ああ、坊主も気いつけてな」

●路地

狭い路地。ごみ箱の脇に、野良猫がいる。

クウ「おいで」

クウ、手にしていた角砂糖を差し出す。野良猫、クウの

手のひらの角砂糖をひと舐めして、口にくわえ、走り去

る。数歩走ったところで、クウを振り返る。

クウ、片手を上げて

クウ「バイバイ」

走り去る野良猫。クウの背後にラッカ。

ラッカ「クウ！」

クウ「あ、ラッカだ」

ラッカ「何してたの？」

クウ「ん……………挨拶」

クウ、ラッカのすぐ後ろに停車したカナの自転車に気づ

き

クウ「あ、ポンコツ号だ」

カナ「ポンコツって言うな！」

クウ、たたた、と走つて、荷台によじ登る。

クウ「ポンコツ号、発進！」

カナ「だからやめろつて。こいつ、悪口言うとチェーンはずれんだ

から」

ラッカ「三人乗れるかな」

カナ「ムリムリこのポンコツ……………じゃなかった、骨董品」

クウ「じゃあ、三人でじゃんけんだ。じゃーんけん」

カナ「ふざけんな！」

●ゲストルーム、翌日、早朝

ラッカ、着替えて、出発の準備をしているところ。ノツ

クをして、レキが入ってくる。

レキ「おはよー。あれ、ネムは？」

ラッカ「まだ寝てる」

レキ「ああ？なんだ、珍しく早起きして頑張つてると思ったら、文

字通りの三日坊主か」

ラッカ「ううん。昨日夜中まで図書館に泊まり込んでたから」

レキ「なに？仕事？」

ラッカ「ううん。個人的な事だけど、すごく大事な事……………かな」

レキ「はあ……………？なんかしらんけど、じゃ、朝飯、軽いものにし

てバスケットに詰めとくよ。そしたらぎりぎりまで寝かせと

けるし」

いつもの事、という感じでしたすと台所に行くレキ。

ラッカ「ありがとう、私も手伝う」

●台所

髪を後ろで結び、慣れた手つきで握り飯を作っているレ

キ。見様見まねのラッカ。

ラッカ、ちらっとレキの方を見る。廃工場の出来事を思い出す。

ラッカ(モノローグ) 『お姫さま……………か……………』
レキ「ラッカ」

ラッカ、突然呼ばれてびくつとする。ラッカの握り飯は形がいびつになっている。

レキ「三角、三角」
ラッカ「あ……………」

のれんの向こうで、ドアの開く音。続いてばたばたと足音。

ネム「うわー大変、ラッカ、私ご飯いいから……………あれ？」
レキ、バスケットに握り飯を詰め終わり、フタをしたところ。

レキ「ドンピシャ」

ラッカとレキ、顔を見合わせ、笑う。

●町へ続く道、早朝

まだ朝靄のかすかに残る畦道。ラッカが自転車を漕ぎ、ネムは後ろの荷台でラッカにもたれてうとうとしている。自転車の籠にはバスケットと、リボンのかけられた小箱。

ラッカ、嬉しそうに。

ラッカ「スミカさん、喜んでくれるといいね」
ネム「……………んん。ムニャ。あきられたら、ラッカのせいだからね」

ラッカ「え、なんで？」

ネム「そりゃ、あなたとの合作だもの。表紙にもラッカの名前入ってるからね」

ラッカ「……………ええーっ！」

ネム「今さら何よお」
ラッカ「そうじゃなくて……………いいの？」

ネム「連帯責任よ、覚悟しなさい」
ラッカ「ネム……………私、すごく嬉しい」

ネム「……………スミカもそうだといけれど」
ラッカ「そうに決まってるよお」

ネム、安心したようにほほ笑み、ラッカにもたれて寝てしまう。

画面、ホワイトアウト。

●世界の始まり

霧の中のような世界。以下の○は画面に入る絵本の挿し絵。『はネムの声で

○世界のはじまり、という金の刺繍の文字

『これは、世界の始まりについてのお話です』

○何も無い空間。くすんだ色の紙を鉛筆の繊細なハッチングで塗りつぶした絵。

『……………昔々、まだ世界というものがなかったころ、そこには暗い、無という名の『何も無いなか』が、どこまでも広がっていました』

ました』

○杖をついた、長い髭の老人がやってくる。頭にリングではなく丸

い板状の光輪があり、羽が生えている。老人のまわりだけ、闇は退いている。

『あるとき無の中に、神がやって来ました。神の明るい光輪のおかげで、無には光が生まれました』

○神、光輪を手に取り、高く掲げる

『神はその頭上の光輪を、高く掲げました。光輪は太陽になりました』

○杖の絵。杖の先から線が生まれている。

『神がその手に持った杖を一振りすると、無は二つに裂け、ひとつは空に、ひとつは大地になりました。神は威厳をもって、まっすぐに線を引きこうとしたのですが、手元が狂って線はゆがん

でしまいました。それは山と谷になりました』

○腕組みしてうなずいている神

『それを見て神は言われました「完璧にうまくいくより少し間違いがあった方が良いものができるものだ」神はもっともらしくうなずいて、山と谷を残す事にしました』

○空と大地。空に太陽。水滴が落ちる絵

『神の光輪はあまりに熱かったので、無は汗をかきました。汗は雨となり、大地に海が生まれました。それどころか、光輪は無を焦がし、空に黒い雲が生まれました。無はあまりの熱さに、ゴロゴロとうなり声を上げ、滝のような汗を流しました。神は慌てて光輪に、ひとつ所に留まらず、空を巡れと命じました。無はほっとため息をつき、ため息は白い雲になりました。太陽は空を巡り、空には昼と夜が生まれました』

○腕組みしてうなずいている神

『それを見て神は言われました「これはとんだ大失敗をするところだった。だがまあ、大事なくて良かった」神は同じ間違いをしないように、黒い雲を残し、何かあったら雷を落として知らせるよう命じました』

○杖で地面に絵を描く神。描いた絵は地面からびよこりと起き上がっている

『神が大地にその杖で絵を描くと、絵は次々と命を得て、大地の上に起き上がりました。大地には草が生え木々が生い茂り、虫や動物が生まれました。海には魚や貝が生まれました。空には鳥が生まれました』

○人と灰羽の絵を前に、悩む神

『最後に神は、その頭（こうべ）の中で、自分の姿に似せた生き物を描かれました。最初につくった生き物は神とそっくりでした。これは失敗でした。そこで、羽を灰色に塗り、光輪に穴を開けて、それを灰羽と名付けました。これもまたいまひとつの出来でした。神は改めて、羽も光輪も無い、人間をつくられました。これは良い出来でした。そこで神は人間に命をあたえました。神はすっかり満足して「やるべきことはすべてやった」といい、そのまま………』

○だらしなく居眠りする神

『ここから』はラッカの声です。

『………疲れて居眠りをしてしまいました』

○鼻提灯を出して居眠りしている神。シャボン玉のように鼻提灯がふわふわと飛んでゆく。その中に灰羽の姿。

『神の頭（こうべ）の中にあつた灰羽は、こうしてすると神の頭（こうべ）の中から逃げ出してしまいました』

○黒い雲と雷。目を覚ました神

『黒雲のうなり声と雷で、神は目を覚ました。慌てて辺りを見回すと、空に灰羽が浮かんでいました。神は鼻をこすって「これまた失敗した」と叫びました。でも神は失敗に寛大だったので、気を取り直してそのちっぽけな世界と灰羽達を残す事にしました。その場所はグリという名をあたえられ、灰羽には、人が廃棄したものを引き継ぐという役割があたえられました。そこには人が住み、街が生まれました。………こうしてグリの街は、大地でも海でも空でもない場所に、誰にも知られる事なく、今もぼつかりと浮かんでいるのです』

原稿用紙200字詰め12枚（表紙含まず）

あとがき

いかがでしたでしょうか？今読み返すと、至らない部分や気恥ずかしいような部分も多く、特に初稿はキャラクターの立ち位置や性格づけが決定稿と違う点もあり、その違和感がまたむずがゆかったりもするのですが、同時に書いた当時の気持ちもよみがえってきて懐かしくなったりもしました。6話以降も、いくつかのバージョンがありますので、それも紹介できればと思います。

1巻に1話、とっていたのですが、13巻組だとあまりにも分厚くなってしまうので、1巻に数話ずつ収録して、できるだけ早く完結させて、最終的にはケースを作ってまとめておけるようにしたいと思っています。

こうしているうちにも新作のアニメの製作も進んでいますし、また同人誌で自分の次の企画のサンプルをつくろうという計画もあります。脚本集と平行してそういったものも楽しみにしていただければと思います。

■ 灰羽連盟 脚本集 ■

はパンケーキ！
子供たち、わーっと呼んでご飯を食べ始める。ベソをかいていたハナも素早くニンジンを入れた。レキの方は見てにらりと笑う。
レキ「あーっ、今までの苦労は何だったんだー」
養母「アメとムシじゃな。アタシの分もちゃんと買ってきてくれよ」
レキ「なんだよ、結局はあさんが食いたかっただけかよ」
ラッカ「あ、私買ってきます」
レキ「いいの？」
ラッカ「ヒカリのパン屋でいいんでしょ。ちようど見に行きたかったし」
●オールドホーム 門
ラッカ、出欠表の札を裏返し、壁に立て掛けてあった自転車を押して門を抜ける。さつき機の前ですれ違った子供たちが、門の影からオールドホームの中を伺っている。
ラッカ「あ、ニンジンがいらいの子たちでしょ」
子供C「えー、なんで知ってるの？」
ラッカ「今すぐ教室に戻って、レキ先生と養母のおばあさんに謝らないと、おやつ抜きだつてよ」
子供D「おやつって？」
ラッカ「パンケーキ」
子供C「あまいやつ？」
ラッカ「うん」
子供C「えーずりい」
走り去る子供たち、くすくす笑うラッカ。
クウ「あ、ラッカだー」
クウ、ふらふらと門をくくって歩いてくる。頭に帽子。
ラッカ「あ、クウ」
クウ「どこいくの？」
ラッカ「ちよっとパン屋まで。あ、そうだ、クウ、ヒカリの働いているパン屋ってどこか分かる？」
クウ「えー、知らないの？（ぱっと明るい顔になって）じゃ、ク

▲このあたりのやりとりも、正の漫画でやってたテンポと音が別の感覚だじ、そこそこ成立するのだが、アニメになってみるとリズム感が入らな、考えていたよりひどくひどい動作が見えてしまっ、間違ひしてしまっ、このあたりは本音に難しい。

■ 正誤表

灰羽連盟脚本集第参巻において、1ページ抜けている部分がありましたので、ここに掲載しておきます。本に挟み込める形の訂正ページは、別に製作して、2005年夏のコミケで配布する予定ですが、手に入らない人がいるかもしれませんので念のため。データ版をダウンロードする事もできます。

http://homepage.mac.com/abworks/hai_s03_22ag.zip
うっかりしてしまい、大変申しわけありませんでした。

▲場所も知らずに出かけている、ササエさんばりにじりじりかた。

奥付

灰羽連盟脚本集第四卷

発行責任者 AB / 安倍吉俊

発行元 むてけいロマンス

発行年月日 2005年08月14日

連絡先 abetc@mac.com

無断転用を禁じます





